

も、今日の話にしても、また温泉場で會つた時のことにしても、一つとして快よい感じを彼女から受けてゐなかつた。お須磨の心は辰衛には、略ぼ解つてゐた。自分を誘惑しようとするほどに、彼女の態度が積極的に出て來ることがあつた。しかし、さういふ場合には、辰衛は巧に鋒先を避けて、それでも肯かなければ、少し怒つてやることすらあつた。大人氣ないとは思ふけれども、かういふ圖々しい女には、さうでもするより外に道がないとさへ辰衛は思ふのであつた。

『あなたは好んで、僕の家庭を破壊しようとするんですか。悪魔になるのを好むんですか。』とまで言つてやつたことがあつた。さうまで言はれると、有繋のお須磨もち／＼となるのであつたが、そんなことのあつた翌日になると、直ぐまた彼女はけりとして、もの忘れしたやうな顔をしてゐるのだつた。

『あんな女に會つちや、全くむきになつて怒られもしない。怒るだけが、莫迦々々しい。』と言つて、彼は笑つたりした。

『だが、小人閑居の類かしらんが、いろんなことを考へ／＼してゐる女だよ。』

辰衛はまた誰に云ふともなくさう獨語ちて、居間を立たうとした。と、そこへ先刻のお今が郵便をもつて入つて來た。二三通の郵便の中に、絢子から來た一通があつた。

辰衛はまた白井と云つた男のことを思出して、不快な顔をした。

『これだけなのか。』

『は、さやうでございます。あとは大旦那さまの方へ、參つてをりました。』然う言つて、お今は引下つた。

辰衛は絢子から來た手紙は、何故か後廻しにして、外のを先に讀んだ。それは皆な彼の友人や其他の人からので、別段これと云ふ用事の手紙でもなかつた。最後に手に取上げた妻の手紙は、西洋紙にこんなことが書いてあつた。

「今度のお休みにお出でになりますのを待ちかねて、此の手紙を差上げます。貴方がお歸りになりましたあとは、急に淋しくなりました、お篠と二人でいろ／＼とお噂ばかりいたしてをります。私はおかげさまで、體はもうすつかりよくなりました。それから、もう一日も早く東京へ歸りたいと思ひます。もう／＼これ以上長くこちら

にゐたいとは思ひませぬわ。我儘のやうですけど、今度貴方がいらつしやる時は、そのおつもりで御相談におのり下さいませね。

「でもね、お須磨さんがなくなりましてからは、眞實に氣がのんびりしましたわ。僅かの間でしたけれど、あの人と一緒にをります時は、もう氣窮りで、それゝ厭でございましたの。それにね、あの人はあんな風でせう。だから厭なことばつかり、言つたりしましてねえ。いつかもね、白井さんのことを左や右品評したりして、それゝ可笑しいんですの。どうして、あの方はあんなにあるんでせうと、私然う思ひますのよ。さうく、私いつもうっかり忘れてますけど、白井さんに

爰まで讀んで來た時、辰衛は何かを見詰るやうに、目を睜つたのであつた。

「白井さんに六年ぶりでお目にかゝりましたわ。ほんとに不思議でしたわ。あの方はね、今判事ですの。以前父の所にあつたんですわ。すつかり立派な紳士になつてゐらつしやいましたわ……。」

「そんなことか。何でもなからう。」辰衛は獨語に言つて、やがて手紙を封筒に納めた。四下には、いつか夕濛が漂ふてゐた。

三十五

其晩、文平の寢室では、お須磨と文平とが寢物語りにこんな話をし合つた。何時にない涼しい晩であつたけれども、室内には煽風器が休みなく動いてゐた。縁側の軒先に吊された風鈴の音も、何となく涼しかつた。庭には放たれた鈴蟲などの蟲の音が、いかにも夏の夜の風情に添へてゐるのだつた。

「私ね、昨夜實家で妙なことを父から聞いて來ましたわ。」

早寢の文平も、お須磨に引かされて、まだ床には入らないで、縁側へ出した籐椅子に寝ながら香の高い葉巻を喫してゐた。お須磨は鬨居の内、だらしなく膝をくづして坐りながら、繊細な手に小判型の團扇を弄つてゐた。

「何を聞いた？」文平の聲は、何時ものやうに味のない太い聲音であつた。

「絢子さんか、辰衛さんか、ごつちかゝね、ひよつとするとね、眞實のお子さんぢやなからうつてことなの。」と、お須磨は他を憚るやうな低聲で言つて、「あなたに伺つたら判るでせうと、然う思ひましてね。」

「ふむ、然うすると……。」文平はちろりとお須磨の白い顔を見下した。「つまり、辰衛が俺の子ぢやないか、絢が山村の子ぢやないか、ごつちかぢやと云ふんだね？」

「まあ、然うなんですの。」

「して、誰の子なんだ。」

「それあ、まだ判らないわ。あなたに訊けば、判るだらうともつたんですもの。」

「お前のお父さんは、何て言ふんだ。」

「父もそれあね、奈何ともはつきりしたことは、言はないんですわ。」と、お須磨は倉造が言つたことを簡略話して、「ですけど、それあ眞實でせうか。まさかねえ、あなた。」

「然うさなあ。」文平はそれで思當つたと云つたやうな顔をしたが、大して驚きもし

ないで、「そんなことが、あつたかも知れんよ。だが、絢の方はそれあ人違ひだらうよ。彼女は正しく山村さんの實子なんだからね。」

「では、辰衛さんは然うだと、仰言るんですか。」お須磨の眼は異様に輝いて來た。

「いや、知らん。」と、文平は平氣で應へて、「俺は一向覺えはない。勿論、それは、辰衛は俺の子ぢやないんだ。それは何もお前に秘す必要はない。今日までだつて、何も隠立てした譯ぢやないがね、別に急いで明す必要もなし、また其の機會もなかつたからなあ。」

「然うですか。やつぱり？」

「やつぱり？」と言ふと、何かお前に思當ることでもあるのか。」

お須磨は些つと首を傾げて、「こんなこと云ふと變ですけどもね、私何だかそんなよな氣がしてゐたんですの。ごうも、辰衛さんはあなたの眞實のお子さんぢやないかも知れない。」

「ぢや何だね、親子らしい情合がないとでも云ふんだね。は、然うかね。だが、それ

をお前は辰衛に言つたか。

「辰衛さんにですか？ いゝえ。うつかりそんなことを耳に入れてあの人を失望さしても悪いでせう。だから……。」

「それも然うだが、強て隠す必要もなからう。俺は何時でも其の氣であるよ。」

文平は然う言つて、また仰向きになつた儘、甘さうに糞を喫し始めた。

お須磨は何だか聞きたりないやうな氣がした。まだ何かあるに違ひないやうに思

へてならなかつた。隠立てしないと云ふ文平の口裏に、何かもつと大きなあるものが

潜んでゐるやうな氣がして爲様がなかつた。しかし、それも時期が來れば明る。――

然う思つて彼女は、何時でも其の氣である、と言つた文平の胸の中を考へながら、

「お可愛さうちやありませんか。貞子さんと云ふお子まであるんですから……。」と、言つた。

「それは俺の心一つだ、俺は此頃氣に染まねことがあるんだ。」と、文平はやをら椅子から半身を起して、意味あり氣に然う言ひながら屹とお須磨を見た。

「實はな、辰衛は他から貰つた子なんだ。だが、籍だけはね、養子にはなつてをらぬ。

立派に俺の子としてゐる。それは云ふまでもなく、藁の上から貰つとるからなあ。で

あれも、今が今まで俺の實子だとばかり、思つてゐるんだ。」

「まあ。」お須磨は業山に言つて、「それでは一層何ちやありませんか。そんなこと仰言つちや不可せんわ。いつまでも、あなたのお子にしておいた方がようござんすわ。」

「孰らでも介意つたこたない。」然う言ひながら、文平は椅子から下りて、ふうわりと厚い革座布團の上に腰を下して、「俺は大體人情っぽいことは嫌ひだからな。他人な

ら他人で……その方が氣持がさつぱりして可い。」

「でもね、財産を譲るにしたつて、他人では張合がないぢやありませんか。」

「俺は、お前に死水をとつて貰へば、それで満足だ。」

「それには、絢子さんて方もございますわ。」

「絢子かい。」と、文平は笑つて、「あれはな、もどく辰衛が所望なんで、俺の方では借金の抵當に取つたやうなものだが、何だかどうも氣心の知れない女だよ。」

「あなたも、然うお思ひなすつて？」お須磨は我意を得たと云はぬばかりの顔をして嫁らしてから、もう何年にもなるのにねえ。まだそんなのですの。」

「此頃は、それでも些とはお前に懐いたか。」

「私もねえ、奈何かして、絢子さんと仲よくして戴かうと思つて、いろく苦勞してゐるんですけど、とてもね、駄目なんですの。それね、私が後から入つて來たんですから、幅を利かされたつて、爲方はありません。けれど、だいちね、政治家のお嬢さんと、請負師の娘とでは、肌の合ふ氣遣ひつこはありやしませんわ。」お須磨は小氣味よさうに、つけくと言つた。

「まあ、そんなこともなからうが。」と、文平も苦笑して、「事によるとね、俺は絢子を實家へ歸さうかとも思つてゐる。近頃のやうに身體が弱くてはね、手がかゝつて爲様がない。」

「そんなことが、あのう出來ますか。」

「出來るか出來んか、それも俺の心一つなんだ。俺が慫うだと云へば、それに従ふよ

り爲方なからう。大體此頃の子は、親の言ふことゝ來たら、一つも肯かないことゝばかり、決めてゐるから間違つてゐるんだ。辰衛に限らず、世間を見渡すと、ごうも此節さういふ手合が多い。」

「それも、然うね。」と、お須磨は調子よく受けて、「貴方の仰言ることなら、何だつて通らないことはない筈ですもの。でも、なるべくならねえ、圓く……。」

「無論、俺も事は好まん。」文平はさう言つて、便所へ立つたが、やがて出て來て、

「もうぼつ／＼寝るとしようか。其前に、何か冷たいものでも飲むかな。」

「アイスクリームでも拵へさせませうか。」

お須磨はさう言つたが、直ぐ立たうとはしなかつた。まだ前の話を續けたさうに、熟と考へ込んだ。と、思ひ出したやうに、

「貴方は白井さんて方、お知りにならない？」

「うむ？ 白井？ いや、知らんそれは誰だ？」文平はきよとんとした顔をした。

「いえ、何でもないんですけどね、何だか絢子さんはね、其方と親しくしてゐらつし

やるやうなの。」

「それは誰だ？」

「誰だか、何でも六年前に絢子さんのお宅へゐた方ですつて。何ですかね、六年ぶりにかに會つたんだなんて、それあ、はしやいでゐらつしやいますわ。」

「ふむ、然うか。辰衛はそれを知つてるのか。」

「それが變なんですよ。辰衛さんはね、些とも知らない方ですつてから。」

「ふむ。」 文平は、お須磨が思つてゐるほど別に氣にも止めないで、けろりとしてゐた。

良人の疑ひ

三十六

辰衛は歸朝以來、絢子の健康は勝れないし、文平は文平で、妻の父と貸借上のこ

とで、問題を醸してゐる上に、お須磨といふ若い女を……それも妾でもあることか、正妻として籍を入れたのも、何だか自分等夫婦への對抗動か何ぞのやうに思はれて不快であつた。そのお須磨が此頃は隙さへあれば、傍へ寄つて来て、愚にも付かないお饒舌をして、厭な目遣ひなどするのが、堪らなく煩かつた。

洋行前までは、父子の情愛がもつと有つたやうに思へた。無論、空手で巨萬の富を作つた男だけに、細かい人情や、美しい感情には缺けてゐた。冷酷ではないながらも我が強のところはあつたが、その代りに氣性は割合に豁如としてゐた。それが此頃では、不思議に片意地なところが出て来て、父子の親しみが薄らいだやうに思へてならなかつた。

辰衛は、それが何となく不安であつた。そして、それにはお須磨が、何か水を差していもゐるのではないかと思はれて、氣がおけてならなかつた。それで、お須磨には成るべく觸らないやうにしておかうと思つて、避けるやうにしてゐたのであつた。しかし、あの洋館以來彼女は一層狎々しい態度になつて、昔馴染か何かのやうに、巫山

戯た口をさへ利くのであつた。そして、何かと云ふと、彼に絡みついて来るやうな調子であつた。

辰衛は、それが煩いので、ある日絢子を迎へに行くと言つて、ふいと家を出て修善寺へ行つて了つた。それは絢子から手紙を受取つた日の翌々日であつた。

汽車に乗つたけれども、彼はもうせい／＼するやうな好い氣持になつたが、絢子に逢ふのは一層嬉しかつた。

絢子は健康も殆んど恢復したし、東京のことも氣懸りなので、早く辰衛が迎へに来てくれれば可いと思つてゐた。で、何時にない懐しい表情をして良人の顔を見た。

「私もう、東京へ歸りたくて／＼、爲方がなかつたんですの。」

絢子は縁側の椅子に倚つて、庭の石の間を流れる水を眺めてゐる辰衛に話かけた。急に暑くなつたので、此所の宿はどの部屋も、ぎつちり客で詰まつてゐた。

「然うだらうとも、もう餘程長くなるね。」

「え、今日でもう一月と二十日よ、つい二週間くらゐと思つて参りましたのに、隨

分長くなりましたわ。」絢子は幾らか色が黒くなつたかと思はれたが、それだけ血色も好くなつて、頬や何かにも肉が付いて来たやうであつた。

「よく辛抱した方だね。だが、病院にゐるより優だらう。」

「あんまり然うでもありませんわ。」絢子は笑つて、「それが一週間や十日はね、山川なんかも珍しいから可ございますわ。ですけれど、一月も幾らも同じ部屋にゐて、同じ山と眺めつくらしをして、ね、毎日判で押したやうにお湯に入つちや御飯を戴いてゐるんですもの。好い加減あなた、飽々してしまふぢやありませんか。」

「だけご己の所爲ぢやないよ。」と、辰衛は笑つた。絢子も引き入れられるやうに嫣然した。

「しかしね。」と、辰衛は煙草に火を點けて、悠然と喫ひながら、「東京もあんまり感心しないよ。生活に變化はあると云ふもの、詰りは同じことを繰返してゐるんだもの。

己はまあ一週間ばかり、此處に遊ばして貰はう。家が煩くて爲方がないからね。」
「家が煩いんですつて？」と、絢子は聞答めて、「奈何してせう。」

「何だか知らないがね、此頃はさつぱり面白くないよ。一つはお前がゐないせゐもあるがね。」

「私なんかゐなくなつて……。」絢子は獨語のやうに言つた。

「心細いことを言つてくれちや困るね。お前がゐなくて、家が面白い譯はないぢやないか。」辰衛は熟と妻の顔を見た。

絢子は心持ち顔を赭らめた。そして、

「それあ私だつて、こんな所に獨りであるからこそ、淋しいんですわ。」

「お前はまだ可いさ。子供もゐるし、篠やも付てゐてくれることだし……僕は毎日毎日歸ると、あの廣い中に、獨りで寝たり起たりしてゐなければならぬのだからね。」

「だが、それも可いさ。だけどね、此頃家が何だか變てこなんだよ。家の空氣がね。」

「それあ然うですわ。お須磨さんと云ふ人が、入つて來たんですもの。」

「然うだらう。お前も然う思ふだらう。」

「でも、あの人、別に惡氣はないのね。」

「うむ、僕も然うは思つてるがね。しかし、油断は出來ないよ。」辰衛は考へ深い目色をして、「親父の、此頃の僕に對する態度がどうも可怪いよ。洋行前はあんな親父でもなかつたんだがね、今度歸つてみると、何となく勝手が違つたやうで、僕は一日も愉快に思つた日はないんだよ。」

「然うですかしら。」と、絢子はじろりと良人の顔を見た。と、留守中に起つたあの男の舉動が思出されて、自然に顔が曇つた。

一時は、此事だけはどんなことがあつても、秘密に葬つて誰にも話すまいと彼女は思案をきめてゐたのであつたが、熟々考へてみると、妻として良人にだけは一應打明けておくべき義務があるやうな氣がした。しかし、其の結果父子の間に厭な感情を懷かせて、これまでは左に右平和であつた一家の中に、風波を起すやうなことがあつては、取返しが付かないとも思はれた。これは矢張り、自分一人の胸に奥深く藏つておくより外爲方がない。——絢子は然う心に決めたのであつた。

「僕の留守中、別に變つたこともなかつたのだらうね。」辰衛は何時かも聞いたこと

を、今日また更めて妻に訊ねたりした。

『え、別段ね。』

『して見ると、お須磨が来てから、親父の僕等に對する考方が變つて來たものと、推定する外はないぢやないか。』

『然うかも知れませんが、私の實家との貸借關係や何かについて、お舅さんは私に對してね、あんまり好い感情を有つてゐらつしやらないやうですわ。事によると、それがね、貴方にまで及ぼしてゐるんぢやないでせうか。』

『それが可笑いぢやないか。親父は金に對しては、昔から可也執着の強い方ではあつたがね。しかし、それはもどくお前の實家を救ふつもりで出した金ぢやないか。連帶の負債だつて、やつぱりその趣意から出たものさ。それを此頃になつて、短兵急に督促してさ、實家の岳父さんの感情を悪くしたり、連帶の責任を免れたりしようとするのは、日頃の親父にも似合はない遣方だと思ふんだ。僕は何れそれについて、親父に一談判してみるつもりだがね、親父の態度が劇變したんで、實は惘れてるのさ。』と

辰衛は歡息するやうに、『その後、實家の岳父さんから、何か言つて來たのか。』

『いゝえ。』と、絢子は術なげな表情をして、『多分ね、私に心配かけては悪いけども思つてゐるのでせうけれど、事によるとね、怒つてるのかも知れませんが、私がゐて、そんなことをさせてね、傍觀してゐるのは怪しからんとでも思つてゐるのかも知れませんがね。』

『あの一徹な、お前のお父さんのことだからね、然うかも知れないね。左に右我々は苦しい立場に立つたものさ。』

『眞實にね、私、貴方にお氣毒でならないのでございますの。』

『それで、お前は結局奈何するつもりだ。』

『私も、あのう途方に暮れてをりますの。』と、絢子は益す顔を曇らして、『實家とお舅さんの間柄が、こんな風にならうとは私想像もしていませんでしたわ。かうなると、私なぞがね、愁ひ口を利いたところで、聞いて下さるやうなお舅さんでもございませぬしそれを考へるとね、安閑とお湯になんか、入つてゐられないんですよ。』

『だが、それとこれは、お前別問題さ。』辰衛は短くなつた荻を、ばつと庭先へ投げ捨て、尙も何か話し進まうとしたところへ、お篠が貞子を連れて歸つて來た。それで、夫婦の話はそれきりになつて了つた。

『いよう、貞子も丈夫さうになつたね。』と、辰衛は懐つこく寄つて來る子供を、すつと抱き上げて嫣然笑つた。貞子は持つてゐた玩具を、父の目の先へ持つて行つて、さも嬉しさうにした。

『まあ、何時の間に入らしたのでございますか。些ども存じませんで、失禮いたしました。お篠は愛想笑ひをしながら、辰衛にお辭儀をして、『まあ、お嬢さま、好うございますわねえ、お父さまにまた抱こされて。』と、左も満足げに微笑むのであつた。

『婆やも體屈したらう。餘り長いんで。』辰衛は、思ひやり深さうな目をお篠に向け

た。『いえ、ごういたしまして、私などはお蔭さまで、ほんとに好い氣保養をいたしましたわ。唯奥さまがね、さぞお淋しいこととせうと、然う思ひまして。』

『それももう二三日だ。愈よ歸るよ。』

『あら、さやうでございますか。旦那さまもそれまで……。』

『うむ、俺も二三日ゐて一緒に歸るよ。』

『會社の方は宜しいんですか、貴方?』絢子は、包みきれぬ嬉しさを無理に抑へるやうにして、良人の晴れやかな顔を見た。

『あ、可いとも。』辰衛は氣輕に應へて、『それに、暑中休暇も直ぐだからね。何なら、夏休みには河岸を替へて、何處かへ出かけようか。』

『然うですね。鎌倉の別荘は駄目?』

『鎌倉か。鎌倉ももう面白くないからな。それに、あすこはひよつとすると、親父が行くかも知れない。』

『然うですわね。』絢子はまた俯向いた。

三人の間に、暫らく避暑地行の話などが交はされた。お篠も彼方此方これはと思ふところを見立て、話を持ち出して見たが、別にこれと決まつたことにもならないで、

三人の話題は自然と、東京の家の方へ移つた。
そんな風で、絢子の父の債務關係の話は、それきりになつて、爾後夫婦は成るべく其の問題には觸れないやうにしてゐたので、絢子も忘れるとはなしに、其事は餘り氣にかけないやうになつた。

三十七

迎へに來た筈の辰衛は、其の翌日も、また次の日も歸らうとしないで、暢氣さうに湯に浸つたり、瀧を見に行つたりしてゐた。

すると、ある日散歩の途中、辰衛はふと思ひ出したやうに言出した。それは、お須磨から聞いた白井のことであつた。先日絢子から出した手紙の端にも些つとそのことが書いてあつたので、彼は來ると直ぐ訊ねて見ようとしたのだが、何だか變でもあるし、言出す機會もなかつたので、今日まで口へは出さずにゐたのだつた。

絢子は訊かれても、別に驚きはしなかつた。顔色も變へなかつた。そして、お須磨

に言つてきかした通りに、良人へも話した。が、子供の時分からの馴染だと聞いて、辰衛は好奇心が動いたらしく、何時にない熱心な調子で訊ね／＼するのであつた。

「然ういふ男と、六年振りでしかも温泉場で、思ひがけなく會つた時、絢さんはどんな氣持がしたね？」聲はいつもの通り優しかつたが、其の眼は妻の顔から何かを發見するかのやうに鋭く光つた。

「別に奈何でもありませんわ。」と、絢子ははつきりした語調で、即座に應へた。が、顔は我知らず熱るのを覺えた。

「でも、悪い氣持はしないだらう。」

「それは、誰にしたつてね、昔の知合に逢つて、悪い氣持はしないでせうけれど、でも唯それだけぢやありませんか。」

「初戀とか、何とか云ふ關係ぢやなかつたのか。」

「だつて、私はまだほんの子供なんですもの、貴方」

「だが、十四五と云へば、女は異性について、最早無關心でゐられない年だからね。」

それに、お須磨の話では、何だかそこに意味がありさうに思へてならなかつたよ。』
『まあ、然うですか。』と、絢子は幾らか煩さいやうな表情で、『お須磨さんは何と言つたか知りませんが、私に覚えのないことでももの。若し、何かそんな疑ひがおありなら、今度歸りましたらね、白井さんに逢つて下さい。あの人だつて、立派な人格のある人なんですからね。そんなことが知れたら、どんなに迷惑なさるか知れませんわ。』

『いや、僕は何も、お前を疑ぐると云ふ譯ぢやないんだよ。たゞお須磨が荐りにその話をしてゐたからね。何かそんなやうなことが、お前の過去にもあつたのかと思つてね、訊いて見たまでさ。さう眞剣になつては困るよ。』と、辰衛は辯解するやうに言つて、『假令ばその白井と云ふ人が、絢子さんの初戀の男であつたにしたらところでだね、今となつてそれを問題にするやうな僕でもなからうぢやないか。世間にはそんなことはざらにあることだからね。』

『然うでせうか。』絢子は呟やくやうに言つて、それきり暫らく黙つて了つた。そんな風に辰衛からいろんなことを言はれると、反つて白井の印象が分明して來るやうに思へてならなかつた。白井に對して、今まで感じなかつた特種の心持が、色濃く浮上つて來るやうであつた。

絢子は強てそれを紛らさうとして、ふと目をあげて四下を眺めた。二人は今丘の上の遊園地を通つて、寂しい山路を歩いてゐるのだつた。そこは、白井とも一緒に、二度も歩いたところであつた。ステッキを突いて、そこを登つてゐた彼の姿や、話聲が目に見え耳に聞えるやうにさへ、絢子には思へた。

『ぢや、其の話はもう休さうね。』と、辰衛はどある木の株に疲れた腰を下して、袂から巻蓑を取出した。

絢子はそれには返辭もせず、少し離れて木陰に佇んでゐた。

何んだか、急に彼女は心の寂しさを感じて來た。辰衛と一緒にゐることが、不思議のやうであつた。それと同時に、辰衛も何時にない深い目色をして、無氣味な沈黙に陥つてゐた。

彼は彼で結婚以來、覺えたことのないある缺陷を心に感じてゐた。勿論、それは絢子に對する不満ではなかつたが、しかし同時に、今までは思つても見なかつた妻の過去に對する淡い疑ひであつた。口でこそそれは言はないけれども、彼の心の一角には確かに、絢子にかゝる疑惑の雲が現れてゐるのだつた。彼とても、それを否む譯にはいかなかつた。もとより彼が現在想像してゐる以上に、白井と絢子の交渉が進んでゐるものとは思はなかつたけれども、二人の感情が、たゞ此處で會つて散歩して別れたまゝで、永久に會はない以前と同様になるものとは、どうしても信じられなかつた。そこには何か再燃すべき何物か、潜んでゐるやうに疑はれた。辰衛の疑ひと、恐れはそこであつた。

『もう歸りませうよ。』絢子は寂しさうに言出した。

『あア歸らう。』辰衛も身を起した。

歸ると、端なくも夫婦の間に、一問題が持上つたのである。

三十八

床の前の圓窓のところにある机の上に二通の手紙が置いてあつた。部屋へ入つて來た辰衛は、帽子を冠つた儘羽織も脱がないで、それを取上げたが、二つとも絢子宛のものであつた。一つは白井からで、他の一通は絢子の母からで、

辰衛の目の色が些つと變つたが、直ぐ柔かな表情になつて、

『皆な絢さんのだ。』低聲に然う言ひながら、續いて入つて來た絢子にそれを渡した。

『さう。』と、絢子は何氣なく受取つて差出し人の名を見ると、顔色が急にさつと變つたやうであつたが、それを良人に氣取られないやうに、わざと手早く母親のから封を切つて、白井の手紙は机の上に置いた。

『白井々々つて、お須磨さんが口喧ましく言ふのは、此人なんです。どうぞ貴方、封をお切りなすつて。』

『已にかい?』と、辰衛は怫然としたやうな口吻で、『笑談ぢやない。お前のところへ來

た手紙を、己が見る必要はない。」

『でも、介意ませんわ。あの方と私との間には、貴方に知られて困るやうな秘密はないんですから。』

『それあ然うだが。』辰衛は不愉快さうな苦笑を浮かべて、『しかし、少くとも手紙の遺取をするくらの間であることは、明白だからね。』

『手紙の遺取つてほごのことは、ないぢやございませんか。』絢子は母の手紙を読む間もないやうに、それを手にしたまゝそこに坐つて、多少興奮した口調になりながら、『此地で不意に行逢つたものですから、つい昔の話が出たんですわ。それから歸つた報知が来たについて、棄てゝもおけませんからね、私も御返辭を書いたんです。女のことですもの、お子さんのことや何か、それあ少しはお愛想も言ひましたわ。それで、あの方からまた此のお手紙が来たんです。それも、ほんの旅先で出来た偶然の機會から思ひ付いたことなんですもの。些どもあの可笑しいことなんかありませんわ。』辰衛は、口髯を撈り／＼聞きながら、ちよい／＼赭らんだ妻の顔を偷見してゐたが

幾らか行詰つたやうな苦々しい顔容でふいと手紙を取上げると、黙つて封を引切つた。

絢子は目色が遽かに變つたがわざと落著いて、自分は母の手紙に眼を落した。そして、やがてそれを讀終ると、吻と溜息をついて其儘縁側へ出て、椅子に腰をかけた。

そのうち辰衛もペンで書かれた白井の手紙を讀んで、それを絢子の前へ突出した。

『大分親しい仲だつたらしいね。僕が若しある女から、こんな手紙を受取つたとしたら妻としてお前は黙つてゐるかね。』辰衛の聲も大分興奮してゐた。

絢子は受取つた手紙の上に、不安な目を走せたが、子供のことなどを言つてやつた絢子の優しい手紙に對するお禮と、絢子が良人や子供のために自愛せんことを希望する旨の文句があるだけであつた。尤も、中には多少婉曲な辭で、孤獨の寂しさを訴へてはあつたが……。

『これが、そんなに不可ませんの。』絢子は獨言のやうに言つて、手紙を卷納めると、些つと起つて元のやうに机の上に置いた。

『左に右、本人のお前さへ疚しくなければ、己はそれで満足する。お前は立派にそれ

を確言できるかね。』

『え、出来ますわ。單純な友人關係以外、あの方と私との間に、意味のあらう氣遣ひはないんですもの。』

『宜しい。』辰衛は笑つて、『それ以上聞く必要はない。己も言ふ必要はないんだ。己はね、お前を愛してゐる通りに、お前を信じる。お前も女なら、己の愛を裏切るやうなことがあつてはならない。』

『言ふまでもないことですよ。生命にかけても、それだけは誓ひますわ。』絢子の聲は分明してゐた。

争

鬭

三十九

『これ、ひと風呂入つて、汗を流して來よう。』と、辰衛は暫らくすると、浴衣に著替

へて、タオルを携げながら部屋を出た。

『お前も入らないか。』

『え、私も入りますわ。』

絢子は母からの手紙をまた繰返して讀んでゐたが、此時些つと良人を見上げて、後から直ぐ行く返辭をした。

手紙によると、島から絢子の父へ長い年月に亙つて時々用立てゐた金が今では可也の額に上つてゐる。それを全部とは云はないが、帳簿の整理に困るから幾分でも返して貰つて、剰餘は纏めて此際擔保を入れて證書にして欲しい。又連帯の負債は利子も大分溜つてゐて、際限がないし計算もやゝこしいから、それも此際誰か適當な人の名義に書換へ、出来べくば自分は責任を脱れたいと云ふので、文平の番頭をしてゐる人から、數回交渉があつたが、父は殊の外の立腹で、話が可也面倒になつてゐる。それは絢子の耳へ入つてゐることではなからうが、病氣でもあつたし、此方からは今まで何も知さなかつた。文平さんから奈何してそんなことを言つて來たのか知らないが、

實は寢耳に水で甚く當惑してゐる。父は怒つて、離縁を貰つて絢子を引取ると云ふ權幕である。其のうちには奈何にか話は付くだらうが、左に右東京へ歸つたら一度澁谷へ私と来て貰へまいか。色々様子も聞きたいし、話もしたいなど、云ふのであつた。

『まあ。』と、絢子は思はず獨語に云つて、深い溜息を吐いた。

今更驚くことでもなかつたが、しかし、母の心配してゐる様子や、父の立腹の有様が、その手紙によく現はれてゐた。が、其の手紙は辰衛には餘り見せたくもなかつたので、私と棚の上にあるオペラバッグの底へ仕舞つて置いた。そして、自分も絞りの浴衣を引つけて、化粧函を携げながら、お篠に貞子連れさせて、風呂場へと降りて行つた。

丁度晩飯のお膳が、女中たちに依つて運ばれ始めようとする時分なので、湯はごこも立込んでゐた。絢子は爲方なし汚ない狭い方の戸を開けると、そこに辰衛が圓々した體を湯に浸して、さも心持よげに手足を暢々どさせてゐた。

『熱くて?』と、絢子は聲をかけながら、伊達巻を解いて浴衣を板の間に脱いだ。そ

して、玉のやうな滑らかな肌を露はしながら慎しやかに三和土へ降立つて行つた。貞子も直ぐ後から、お篠と一緒に入つて來た。

此地へ來た當座は、絢子は肋がとげ／＼してゐるほど痩せてゐたが、今はその骨もむつちりした筋肉に包まれて、亂房の邊りが脹やかに圓味をもつてゐた。そして、白い皮膚が、脂の凝つたやうな光澤をもつてゐた。

『眞實に治くなつたね。』辰衛は湯槽の縁へ來て、體を濕してゐる妻を見ながら言つたが、同時にぼこんと湯から上つて、間もなく風呂場を出て行つた。

行水を濟ました絢子が薄化粧を施してほか／＼する頬を抑えながら、部屋へ歸つて來た頃には、辰衛は餉臺の前に胡坐を組んで、甘さうにビールを飲んでゐた。やがて、そこへお篠も貞子連れて湯から上つて來た。前の山には淡青い夕濛靄が立つて、崖際の二階家には、電氣が漸く赤い光を仄かしてゐた。

『今日は運動したので、實に好い氣持だ。僕は逆も東京へ歸る氣はしないよ。もう一週間、休暇を取らうかね。』

『お止しなさいましょ。』と、絢子は鏡臺の前で、今一度顔を直しながら言った。
『お前は、また莫迦に歸りを急ぐね。』
『そんな譯ぢやないんですけど、餘り長くなつても悪いぢやありませんか。奈何かして明日は立ちたいものですわ。』然う言つて鏡の前を離れると、良人と向合つて坐つたが、絢子は母から來た手紙のことが、矢張り氣にかゝつて、おち／＼話もしてゐられなかつた。

四十

酒量はそんなに多くもない癖に、辰衛は瞬く間に一本のビールを空にすると、また次の一本を倒して、やがて三本目を取らうとした。食事を済まして、一刻も早く母への返辭を書かねば安心が出来ないと云ふ顔容をして、机の前に坐つて筆を執つてゐた絢子は、此時此方を振り向いた。

『まあ、今夜に限つて、奈何してそんなに召食ふんです。體に障ると不可ませんわ。』と、止めたが、辰衛は何時になく調子に乗つて、顔を眞赤にしながら興奮した語調で、
『可いよ、可いよ。己は寂しいから飲むんだ。』と、駄々を捏ねるやうに言張つた。
『寂しいんですつて？』 絢子は聞答めて、『奈何してゐすの。』
『奈何してだか知らないが、何となく寂しいんだ。』辰衛は幾らか、絢子に突蒐るやうな風で言つた。

『まあ！』と、絢子は淋しい微笑を浮べて、『私には、何のこともだか解りませんわ。』
『己は歸朝してからね、一日だつて愉快な日はないんだ。親父と云ひ、お前と云ひ。』と、變な笑聲を立てた。

『私が奈何したと云ふのでせう？』 絢子は顔を赧らめると共に、目に不安な色を浮べながら、『だつて、私がかうして傍にゐても寂しいなんて、奈何してゐせう？』
すると、辰衛は急に沈んだ表情で、

『奈何だね、己に悉皆打明けて、話をしてくれる譯に行かないかね。』
『何をですか？』と、絢子は問返したが、それは無論白井のことだらうと思つたので、

多少煩くなつて、横を向いて了つた。

『お前の過去をさ。』

『過去ですつて？ 私の過去なら、貴方が何も彼も知つてゐて下さる筈ぢやありませんか。』

『いや、それ以外に己は知りたいたんだ。』

『妙なことを仰言るわねえ。』と、絢子は嘆息するやうに言つて、『何時から貴方は、そんなに人を疑ぐる様になつたんでせう？ 私眞實に不思議でならないわ。必然お須磨さんの言ふことでも、信用なすつてゐらつしやるんでせう。あの人は、立派な女ですからね。』

『何だつて？』と、辰衛は少し屹となつて、『お須磨が奈何して立派な女だ？』

『あの人はね、貴方にちやほやして、始終妙な目容をしてゐるわ。』絢子もむしやくしやしたやうな調子で、我知らずそんなことまで言つて了つた。

『それが、奈何したんだ。お須磨がちやほやしようよと、何をしようよと、己の知つたこ

とぢやない。』

『それお貴方は知らないでせうけれどね、あんな人格のない女……。』と、絢子は言ひかけたが、我ながら餘り興奮した辭だと気が付くと、急に恥しくなつて、其儘黙つて了つた。

『そんなことは、お前に聞かなくなつて、己は承知してゐる。』

『それなら可いちやありませんか。』

絢子は曇つた聲で言つたが、同時に何だか悲しいやうな、口惜しいやうな氣持になつて自然に熱い涙がほろ／＼と頬を傳つて流れた。そして、そこに居堪まらないやうな氣分で、ふいと、部屋を出ると、とん／＼と梯子段を降りて、廊下へ出て行つた。

そこから見える植込の向ふに陽氣な座敷が明るく賑やかに、がや／＼してゐた。男や女や子供等が、多勢鬨球盤の周りへ寄つて、面白さうにわい／＼騒いでゐた。すると、また二階からは、三味線の音などが艶めかしく洩れて、美しい聲で令嬢らしい若い女が、長唄を浚つてゐるのが手に取るやうに聞えて來た。

それらの四圍の陽氣な光景が目に入ると、絢子は一層氣が沈鬱になつて、孤獨の寂しみが、沁々と胸に迫つて來るのであつた。やがて絢子の姿は、庭の裏木戸から木立の生繁つた暗い川邊の方へと出て行つた。瀬の音が、静かな夜の空氣に高く聞えた。

四十一

絢子が部屋を出て行つた氣勢に驚いた乳母のお篠は、次の間で寝かし付けてゐた貞子をそうつとしておいて、心配氣な顔を辰衛の前へ出した。

「奥さまは、お小用にでも？」
「お篠は恐る／＼言つて、辰衛の苦り切つた赭い顔を見た。」

「知らん。」
辰衛は何時になく不愛想に言つて、尙もコップを取上げた。

「見て參りませうですか。」
お篠はもう中腰になつた。

「自分勝手に出て行つたんだから、捨置け。」
辰衛はさう言つてお篠を繁々ど見ながら、「それより、お前に聞くことがある。まあ、此方へ寄れ。近く寄れ。」

お篠は爲方なし重さうな膝を心持ち躰り寄せた。

「お前は好く知つてゐような？
白井といふ男のことを？」

「は？
白井さん？」

「然うだ、白井と云ふ男が、此宿にも泊つてゐたらう。そして、絢と始終往來してゐたらう。お前は朝にも晩にも、奥さまに付いてゐて、それを知らない筈はないだらう。」

「はい。あのう、それは、そのお方は存じては居りますが……。』
お篠は、當惑さうに顔を曇らせた。

「奥さまと、大分親しく往來してゐたらう？」

「いえ、ほんの一度、あのう外でお會ひ申して、お話しながら宿までお歸へりになつたことがあるきりでございます。はい、其時は私もお供申して居りましたから、別段これと云つて何のお話も出ませんでございました。」

「そんなことがあるもんか。宿は一緒だし、朝にも晩にも會つてゐたらう。現にお須

磨が此處へ来た時も、二人は外から睦じさうに連れ立つて、歸つて来たつてぢやないか。』と、辰衛は惱ましげに言つたが、手にしたコップを自棄にぐつと飲み干して、『ごんなことをしたか判るもんか。』

『まあ旦那さま！』お篠は驚いて、『それはあんまり酷うございます。奥さまが、お可哀さうでございますわ。奥さまに限つて、決して／＼、金輪際そんなことはございませぬ。それは、その事だけは此の篠やが神かけて誓ひます……。旦那さま、ね、そのお疑りだけは、ごうぞお晴らし下さいまし。それでは奥さまがあんまり、お氣毒でございます。』

『……。』辰衛は難しい顔をしながら黙つてゐた。

『これが、昨今の御夫婦仲ではございませぬまいし、もう五年からにもおなりですし、それにあアしてお嬢さま、お出来遊ばしてゐらつしやるんでございませぬもの。夢にもさういふことがあつて、出来ませぬのですか。』と、お篠は早くも涙聲になつて、『それに、奥さまは御承知の通り、實家のことで大變御心配がございませぬから、實を申

しますと、それどころではないと云ふ心持でございませぬ。奥さまは、ほんとうにお可哀さうでなりません。此上まだ旦那さまにまで、さう云ふ疑ひをかけられましたは、全く奥さまの立瀬がなくなりますわ。ほんとに、それでは餘り奥さまが、お可哀さうでございませぬ。』

顔に袖口を當てゝゐるお篠の様子を見てゐた辰衛は、それで少しは心が緩やいだか、先刻よりは幾分言葉を柔げた。

『無論、俺もより以上に、二人の交渉が進んでゐるものとは思はないがね。しかし、今日のやうな手紙を見るとね、やつぱりいゝ氣はしないからねえ。』

『何か、お手紙に、そんなことでもございましたのですか。』お篠はまた不安な目色をした。

『うむ。』と、云つたが、辰衛は思ひ直したやうに、『だが、絢と白井は昔馴染つて云ふぢやないか。』辰衛の眼は鋭く光つた。

お篠は、到頭打突かる物に打突つたと思つた。辰衛に然う詰問されるやうに言はれ

た時に、胸がどきりとした。遂にその事を言出されたと云ふ氣がした。勿論、白井と
のことを言はれる段になると、昔の事が話題になるだらうとは思つてゐた。其事を訊
かれるだらうとは彼女も豫想してゐた。しかし、それを言出されるとお篠も返辭のし
ようがないし、話の相手にもなり難いので、成らうことなら其事から話を外らさう外
らさうと努めてゐたのであるが、それは遂に徒勞に歸したのだつた。

『はい、それはあのう、以前白井さんが、お嬢さまのお家へ居りましたものでございま
すから……』お篠は爲方がないと云つたやうな顔付で、簡単に然う應へた。

『お前は、其時分のことをよく知つてゐるだらう？』と、辰衛はお篠の顔色から何か探
り出さなければ措かないと云つたやうに、鋭い視線を投げるのだつた。

『よくと申しましたも、私も一緒に居りましたものでございませうから……』

『絢のお父さんは、白井を大分信用してゐたらしいね。將來夫婦にさすやうな仲だつ
たのぢやないか。』辰衛の質問は益す追及的であつた。お篠は愈よ困つて了つた。何
と應へて可いか判らなかつた。しかし、無論絢子と白井がどんな深い仲であつたか知

らないが、夫婦にするやうな話はなかつたことだけは、知つてゐるのであつた。

『いゝえ。そんなことは決してございませんでしたわ。何誰が旦那さまに然う申し上
げたか存じませんが、さう云ふことはお家ではお話もなかつたのでございませうよ。

それは、あの旦那さまのお思ひ違ひでございませう。きつと。』

『何年くらゐ、あの白井は山村にゐたんだい？』辰衛は話題を元へ戻して行つた。

『さあ。』と、お篠は小頸を傾げて、『何年くらゐでしたせう？ 好く覚えませぬわ。』

『其後、白井から絢さんの所へ結婚を申込んで來やしなかつたかね。』

『いゝえ。』然う言つて、お篠は俯向いた。

お篠は一々受應へをするのが煩くなつた。莫迦々々しいとさへ思ふ氣がして來た。
幾ら主人でも、餘り拗いと思つた。これが主人だからだが、外の人だつたら、最う相
手になつてゐないのだ、とさへお篠は心に思つた。

勿論、絢子が度々白井と親しげに散歩に出たりしたのは、人の妻として餘り慎み深
い態度だとは、お篠も思はなかつた。世間の口が煩いから、三度に一度は辭退すれば

好いと思はぬでもなかつた。殊にお須磨が不意に遣つて来た朝などは、丁度絢子が白井と出かけて行つた後だつたので、彼女は獨りで氣を揉んでゐたのだつた。しかも折悪しく絢子は白井と連立つて歸つて来たので、お篠は最う其時から今日あるを思つたのだつた。何か持上らねば可いがと、私かに心配したのであつたが、案の如く、お須磨が大分辰衛の心をそゝつてゐるらしいので、あの時のことが今新しくお篠の胸に思ひ出されたのだつた。

しかし、外の人ではなし、白井とは昔から兄妹のやうにしてゐた絢子のことであるし、六年振りの邂逅であれば、一緒に散歩するくらゐは何でもないとお篠は思つた。寧ろ當然だと云ふ氣がした。假令其人から手紙が来たところで、何もそれを事々しく取上げることはあるまいとも思つた。しかもそれを以て、妻の貞操まで疑ふことは辰衛も紳士らしくない人だと、お篠は多少主人を蔑視むやうな氣にさへなつた。

『だが、しかしお前も絢と同じ穴の貉だからなあ、こんなこと訊くだけが野暮だらう。』辰衛は吐出すやうに言つて、憎々しげにお篠を睨んだ。

『まあ。』お篠は、最うそれ以上何にも言はなかつた。と、其時隣室に寝てゐた貞子が、目を覺したやうなので、お篠はそれを機に立つた。そして、貞子を抱上げると、彼女は辰衛に黙つてそつと部屋を出て行つた。絢子を見に行つたのである。

四十二

『まあ、旦那さまも、ほんとに拗いわ。奈何して今夜に限つて、あアなんだらう？』然う呟きながら、お篠は二階の廊下から下階へ降りて行つたが、絢子の姿はそこには見えなかつた。

『お母さまは、何處へ行らしたのでございませうねえ、お嬢さま！』と、彼女は貞子を相手にそんなことを言ひながら、廊下の隅々まで捜し廻つた。と、ふと彼女の胸にある不吉な豫感が兆した。恐ろしい力で、ちらと不安な影が心に映した。

「ひよつとしたら？」然う心に囁いたお篠は、はつとして、總身に水を浴びせられたやうに慄然とした。でも、あれしきのことです直ぐ思ひ返して、そんな愚かな主人

でないことを思つて、ほつと安堵の胸を撫下した。しかし、それでも矢張り心配になるので、足を急がせて庭へ下りた。出會すたびに、女中にも訊ねて見た。けれども、誰も知らないと言つた。お篠は一層暗い焦燥を感じた。

此上は、宿の主人にでも然う言つて、受持の女中か番頭に、そこらを探ねて貰はうと思つて、お篠は帳場の方へ歸りかけた。と、ふと帳場へ通ずる長廊下の端の上り口のところ、白い羅紗の絢子のスリツバが脱棄して、あるのを發見して、彼女はまた急いでそこから庭へ廻つた。

『やつぱりお庭ですわ。ねえお嬢さま、きつと。』然う言ひながら、飛石傳ひに歩を移した。庭からは別荘の前を通つて、表の往來へ出る口と、下の川縁へ下りる口と、門が二つになつてゐた。

眞逆にそんな無思慮なことをするやうな絢子だとは思はなかつたが、夫婦で感情の衝突をしたなどは、これまでにないことなので、お篠はさう思ふと又候何とはなし氣にかゝつて、念のために暗い川縁の方へ出て、石高な路を下流の方へと歩いて

行つた。お篠の心は何となく焦れた。そんなことを思ふと、今まで辰衛に引止められて、くだらないことを詰問された時間が惜しいやうな氣がした。其間に取返しのかない椿事が湧起つてゐなければいゝがと云ふ暗い不安にさへ襲はれて來た。あの時、辰衛の部屋へ顔を出さないで、直ぐ絢子の後を追へば可かつたに、とさへ思はれてならなかつた。

「でも、そんなことはないわ。決してない。」

お篠はまた然う心に繰返しながら、足を急がせた。と、杉木立の中に、水邊へ下りるやうに出來てゐる段々があつた。若しやと思つて、お篠はそこを透して見た。すると、絞の浴衣を着た絢子のしよんぼりとした姿が、ちらと目に付いた。はつと肚胸を突かれた彼女は、周章て其傍へ寄つて行つた。

『奥さま！』心持ち高く呼んだお篠の聲は、打慄へた。

と、絢子は吃驚したやうに、此方を振向いた。しかし、まだ黙つてゐた。

『奥さま。』と、お篠はまた呼んで、『あなた、今時分そんなところに獨りで何をしてゐ

らつしやいますの。」

お篠の動悸はまだ鎮まらなかつた。聲は仍且はづんでゐた。

『乳母なの？』

『はあ、お嬢さまも参りました。お迎ひに！』

『然う。』絢子は淋しげに、『何だか私、氣が重くつてね、爲方がなかつたから、こゝで涼まうと然う思つてね。』

『母さま！』と、貞子は乳母の背後から、優しい聲をかけた。

お篠は最う胸が一杯になつて、絢子の手を取りながら、『さあ奥さま、旦那さまが心配してゐらつしやいますから、早く彼方へ行らつしやいませよ。』

『あの人が、少しお酒が醒めなければね、私は歸りません。』絢子の聲は、何時になくきつぱりとしてゐた。

頭の上では星がきら／＼と瞬いて、川口の方から涼風が、そよ／＼と吹いて来て、二人の裾を優しく翳つた。

『私、あの人に今夜のやうな侮辱を受けたことはないわ。』絢子はいかにも口惜しさうに、暗闇を見詰めた。

『奈何したと云ふんでございませうね。多分大奥様が、何か仰言つたのでございませう。私もお傍で伺つて、腹が立ちましたわ、奥さまのやうに御潔白な方に、あんなことを仰言るなんて、旦那さまもあんまりでございませう。』絢子思ひの乳母は、まだ其の憤りが治まらないと云ふ風に、『私、よつほど旦那さまのことをね、申し上げようかと存じましたけれど、あんまり出過ぎても悪いと存じまして……。』

絢子がピアノを弾いてゐた時のこと、それは彼女は暖にも出してゐないのであるが、お篠は既にそれを察知してゐるらしい。これまでも、ちよい／＼其の口吻を洩してゐたのであつた。今も、其事を彼女は絢子に言つたのである。

『それこそ、大變よ。』絢子は、吃驚したやうな聲を出して、『お前が知つてるなら知つてるでも可いけどもね、あのことだけは、誰にもね、言つておくれでないよ。可いかい？』

『でもね奥さま、あんまり御潔白過ぎるのも、考へものでございますよ。私はね、あのことがあつてから、大旦那さまの奥さまへの仕向けが、大變淪つて来たやうに思はれてならないのでございます。澁谷のお邸へだつてあんな御無理を仰言つて……。何でもあれを根に持つてお出でになるに、違ひございませぬわ。』

『それは、お前の僻見といふものです。』と、絢子は打消して、『お舅さまだつてね、まさかそんな方でもないでせう。』

『いゝえ、人は見かけによらないものでございますからね。世間の人は、奥さまのお考へになるやうなものぢやございませぬですよ。隙も油断もありやしません。』

『でもね、人は人だわ。此方さへ正直にしてゐれば、可いちやないの。』

『それはまあ、さよですけれど……。』

涼風に鬢の邊りを氣持よく吹かれながら、宿へ歸るのを忘れた人のやうに、其所へ行つたまゝ飽かず交はしてゐた二人の會話は、それで杜切れたが、絢子は思出したやうに、

『お前も何なの、あのう旦那さまに何か言はれて？』お篠が直ぐ自分の後から来るだらうと豫想されたのに、一向そんなことがなく、自分に會ふまでに可なり時間が経つてゐるのを、絢子は胸に浮べたのであつた。

『はあ、私奥さまがお出かけになつたやうでしたからね、些つと旦那さまのところへ参りましたの。そしたら、まあそこへ坐れと仰言つてね。それあ長いことくぐぐと色んなことを訊かれましたわ。』然う言つて、お篠は辰衛が言つたことを何彼と話した。

『やつぱり。』絢子は厭な顔をして頷いて、『白井さんのことを疑つてらつしやるんだわね。どうして旦那さまは、あんな風におなりになつたんでせうね。』然う言つた絢子の顔は、いかにも輕蔑したやうな、煩さうに曇つてゐたが、薄暗がりのために、それはお篠の眼には入らなかつた。

『母ちゃん、歸りませうよ。』突然、乳母の背後で貞子が叫んだので、二人は吃驚したやうに其方を向いた。

『まあ、貞子ちゃんは、寢ん寢してらしたのかともつたら。』と、絢子は母親らしく、

乳母の背から我子を抱取つて、『さあさ、歸りませうね。暗いから……。』
其時、提灯の灯がちらと映して、宿の番頭らしい男が通りかゝつたので、それを機
に二人は急いで往來の方へ出て行つた。

宿へ歸つて見ると、辰衛は酔ひに負けて其座に寝轉んでゐた。絢子は次の間で暫ら
くお篠と貞子と三人で、他愛なく遊んでゐたが、ふと氣付いたやうに、そつと立つて
辰衛の體に軽い毛布を蔽せた。

辰衛は、今夜のことは何も彼も忘れた人のやうに、けろりとした赧い顔をして、ぐ
う／＼と高い鼾聲をかいてゐた。

『男つて、暢氣なものねえ。』絢子は、お篠と顔を見合せて、淋しく笑つた。

父の怒

四十三

修善寺から歸つて來た絢子は、ある朝の新聞に、父が病氣で臥褥してゐるといふ簡
單な記事の出でゐるのを見て、辰衛が出勤した後で、早速澁谷の實家へ電話をかけて
問合せてみた。

すると、母親が直ぐ電話口へ出て來た。そして、さも懐かしげな調子で、『まあお前
かえ、何時お歸りでした。』なごゝ、何時もの優しい聲であつた。

『私ね、つい一兩日前に歸りましたの。早速お伺ひしようど、然う思ひましたけども
ね、長く家を明けてゐたものでございますから……。』

『ああ、然うだともね……もう何かえ、悉皆丈夫におなりでせうね。』

『え、お蔭さまで……あの、大變肥りましたのよ。目方がね、三貫ばかり増えまし

たわ。ほ、ほ、ほ。

『然うですか、何より結構ですよ。そして貞子も無事で……もう餘程大きくなつたでせうねえ。』

『なか／＼おしやまさんになりましたの。大分ね、何かと喋べりますのよ。』と、絢子は然う言つて又笑つたが、急に低い聲になつて、『あの、今朝の新聞にお父さまの御病氣のことが、些つと出てをりますが、何か餘病でも出たんでせうか。』

『いゝえね、餘病といふほどのことありませんけれどもね、少し腸を害して、そのために熱が出たものですからね。此の四五日臥つてゐらつしやるのですよ。……それで、あのね、いろ／＼また逢つて話したいこともあるしするから、都合が出来たら一兩日うちね、些つと来て貰へませんか。』

『え、伺ひますわ。』絢子は軽く受けて、『然うですね、それでは今日午後からお見舞に上りますわ。』

『然うですか、それではね、お待ちしてゐますよ。貞子さんも連れていらつしやいよ。』

『え、連れて行きますわ。いづれ、あのお目にかゝつて……私もね、いろ／＼お話がございませぬ。』と、絢子は些つと調子を變へて、低聲で、『何だかね、厭なことばかりなの。』

『實はね、それについてもいろ／＼相談もあるし、お前の歸りを待つてゐたんですよ。ではね、いづれ後ほど。』

『さよなら。お父さまに宜しく。』

それで電話を切つて了ふと、絢子は急に何だか問題の渦中へ引込まれたやうな氣がして、靜然としてはゐられなかつた。そして髪を解かし付けたり何かしてゐるうちに直ぐ午近くになつたので、絢子は早目に御飯を済ますと、早速支度をして貞子連れて俥で出て行つた。

今まで涼しいところに居た絢子は、外へ出ると赫つとした熱氣が顔に當るやうで、これから先の東京の暑さが思ひ遣られた。そして、長い間鼻の悶へるやうな山ばかりを見てゐた絢子の眼には、生々してみえた都會の町がもの珍しかつたが、それも何だ

か眼には入らず、實家へ行けば何れ好い話はないであらうと思ふと、その問題で腐心してゐる傷ましい母親の顔を見るのも氣遣はしいやうであつた。さうして、其の問題について彼女は、自分の力で出来るだけのことは實家のために力を盡さねばならぬと思つたが、今の場合自分に好意をもつてくれるものは、單だ獨り辰衛があるだけであつた。それなのに、其の辰衛からも、修善寺以來奈何かすると、自分に嫌いなやうな態度を見せるのが淋しかつた。絢子は不幸な自分の立場を悲しまずにはゐられなかつた。

こんなことをいろいろ思つてゐるうちに、俵はやがて實家へ著いた。古びた黒い木の門を潜ると、廣々した門の中にひよろ／＼した松などが四五本植つてゐて、破風造りの玄關や、玄關脇の格子窓や勝手口などが、近頃また目に立つて荒れて來たやうに思へた。絢子はそれが懐しくも傷ましく思へて、自然にほろりとなつた。

四十四

俵が玄關に著くと、直に最上書生や女中がそこへ現はれて、貞子を抱取つて靴を脱がすやら、帽子を取るやら、絢子から土産物の包みを預かるやらした。それと見て母親の田鶴子も奥から出て來て、

『おやまあ、暫らく見ないうちに、大變大きくおなりですこと、さあ／＼此方へ入らつしやい。』と、孫の手を引いた。そして絢子の方を向いて、『唯今はお電話を有難う。このお暑いのに、よく來て下さつたわね。』

『奈何いたしまして。』と、絢子は心配があるうちにも、實家の玄關へ上ると、何だかのんびりしたやうな氣分になつて、『先刻は電話で、ごうも失禮いたしました。』

そんな挨拶を交しながら、絢子は母親の後について、涼しい八疊の座敷へ通つた。

こゝはまた家が古いだけに、庭なども島の家と較べると、かゝつた金目は比較にもならないほど貧弱なものであるが、厭味のない落著きの好い閑雅な點が、何となく彼

女に安定の感じを與へた。室内もそれと同じく、始終明るい芝居の舞臺でも見るやうな、けばくしい島の家に居馴れた絢子の目には、古びを帯びて燻んでゐるのが、何となく彼女の神經を休めるのだつた。

絢子は温泉場の土産などをそこへ出して、『ごうも御無沙汰いたしました。私、こんなに長くゐるつもりではなかつたんですけど、島の都合でね、十日も歸りが遅れてしまいましたのよ。』

『でもお前、長いほど體に利くからね、それほど結構なことはありませんよ。』と、田鶴子はしげく娘の顔を眺めながら、『お湯が體に相應つたとみえて、大變丈夫々々して來ましたよ。』

『然うでせう。三貫目も増えたんですもの。』絢子はまた満足さうに、電話口で言つたことを繰返した。

『そして、辰衛さんも、偶には彼方へ……。』

『え、始終！』と、絢子は些つと美しい眉を顰めて、『何だ彼だと云つてはね、會社

を休んで來ましたの。』

『篠も一緒でしたつてね。あれもお蔭で、散々好い保養をしたでせうよ。』母は獨語のやうに言つて、『真ちゃん、あなたも面白かつたでせう。少し旅行のお話を、お祖母さまに聞かして下さいよ。』

貞子は白い靴足袋のしつくりした、節の暢びた細い足を崩して、母の傍に坐つたり祖母の膝に抱かれたりしてゐたが、長くも然うしてゐないで、直ぐ縁側へ飛出して行つた。

『あの、お父さまは……。』絢子は、氣遣はしさうな目を上げた。

『お見舞ひに來て下さる方がね、それでもちよいとあつて、今日もね、午前のうちは随分忙しかつたのですよ。』

『糖尿病の方は、奈何なんでしょう。』

『その方は今のところね、格別變りはなさうです。ですけれど、心臓がね。』と、母親は些つと顔を曇らせて、『二三日熱が高かつたものですから……でもね、此分

なら心配はないと、お医者さんも然う言つてくれやすからね。」

絢子は、それで幾らか氣が落著いたやうに、軽く頷いたが、「お父さまも、近頃は滅切りお身體が弱くおなんなすつたやうね。」

「何と云つても、お年がお年ですからねえ。」

「でも、島の舅を御覽なさいな。あの年で、若い奥さんなんか持つて……。」

「あの方などは、また別さ。」と、田鶴子は苦笑を浮べて、「それにね、苦勞がおありなさらぬいからね。」

「此頃の暑さにね、一日だつて外へ出ないことはないんですよ。お金がたんごあるんだから、あんなにね、齷齪しなくたつて可さうなものだと、然う思ひますけどねえ。」

「あの方などは、それが又面白いのですからね。」と、田鶴子は笑つて、「それはさうだね、あなたが歸つて來てから、お舅さまから何ぞお話でもありましたか。」

四十五

「絢、絢！」と、然う言つて呼んでゐる父の聲が耳に入ると、絢子は急に話を中絶した。そして、「はい。」と、返辭をすると同時に、彼女は母親を先に立て、奥の病室の方へ入つて行つた。

「さあ、お祖父さまのところへ行つて、ちやんとお辭儀をなさいよ。」

母や祖母に尾いて、ちよこくと入つて來た貞子を、絢子は然う言ひながら父の傍へ連れて行つた。

「お、來たか。」老政治家は、柔かさうな白い蒲團の上に身を起して、にこ／＼しながら孫娘を見迎へた。貞子は祖母に靠れながら、そこへ坐つて、

「お祖父ちやま、今日は……。」と、小さな頭を可愛く下げた。

「お、大きくなつたの。そして、今日は母さまと一緒に。お、然うか、大層お行儀がよくなつたの。」

『ごうも暫らく。』と、絢子もずつと傍へ寄つて、お辭儀をした。『御病氣ださうで、不
可ませんでございませぬね。』

『いや大したことでもないがの。陽氣が悪いので、少しやられたよ。奈何だ、お前は
大層丈夫になつたと云ふ話だつたが。』敏之はさも懐しげに、絢子の心持ち日焦
した顔を眺めた。

『は、お蔭さまで、悉皆快くなりました。』父の辭はいつもの元氣を失つてゐないの
で、絢子はほつとしたが、鼻の下の髭が大分白くなつて來たのが、彼女の眼に痛まし
く染みた。

『これも可い保養をして、結構でございましたわ。』母親も満足さうに口を入れた。
『それは何よりだ。それで辰衛さんも、變りはないか。』

『有難うございます。』と、絢子は父親の様子を繁々見ながら、『お父さまは、其の割に
お瘦せにもならないやうぢやございませぬか。』
『然うか、然う見えるか。』

『御血色も、思つたより好うございますわ。でも、時節柄御用心なさらないと、不可
せんわ。』

『うむ、然うだよ。』と、敏之は嬌然と頷いて、『お前も入湯などして、大分手間がかゝ
つたやうだが、何でも病氣はな、十二分に癒しておかないと不可いのだ。——それで、
家庭の様子は此頃變つたこともないか。』

『別に變つたこともございませぬのですけれどね。私の旅行中何か問題が起つたさう
で、ついあのう長引いたものですから、お伺ひもしませんでした。母さまのお手紙
で初めて詳しいことが判つて、實は吃驚いたしましたの。お父さまには、何とも申譯
のない。』と、絢子が言ひかけると、敏之は首を振つて、

『いや、それはな、お前の知つたことぢやない。しかも病中に持上つた問題で、
多分島一人の頭腦から出たことだらうとは思つたが、何しろ少しも豫期しなかつたこ
とでな、俺も實はあの男の人格を疑つてをるんだよ。尤もあの男に、人格が怎うのと
言つたところでね、言ふだけが野暮かも知れんよ。』と、父親は手を伸して、貰の函か

ら金口を一本取出すと、絢子が摺つてくれたマッチの火を移して、悠乎に煙を吐きながら、『それもぢや、鳥が自身で出向いて来て、實はこれ〜で少し帳簿を整理したいから、濟まないが都合は奈何ぢやなどか何とか言つて、卒直に言つてくれるのならね、俺も氣持が好い。何だか衣體の判らん三百代言みたいな男を差向けてからに、貸した金を返せ、連帶の證書も書換へると云ふのでは、全然事理を辨まへん車夫馬丁の言懸りのやうでな、腹が立つよりも惘れてものが言へんのぢや。假にもかうして縁を結んでをる間柄ぢやないかね。』と、敏之は何時になく興奮して来て、時々咳入るのも介意はないで言ふのであつた。そして、田鶴子が差出した脇息をちらと見やつた。それで、それに倚懸らうともしないで、彼はまだ言足りないやうに、いろんなことを絢子に訴へるやうに言ふのであつた。

『眞實でございますねえ。今もお母さまから其お話を伺つて、私も實は驚きました。』と、絢子は術なげなこなしで、『私には、其の理由がさつぱり解りませんの。』
『理由も何もあつたものぢやない。やつぱり金が惜しいのだ。金が惜しくなると、あ

の男の頭脳には廉恥心も、自尊心も、友情も恩義も、何も彼も失くなつて了うのだ。俺はあの男が憎いよりも、氣毒でならなのだよ。』

『眞實でございますねえ。』

『奈何したと云ふのでせうねえ。』

絢子と母親が、交々言つた。

『事によると、あの男は死期が近づいてゐるのかも知れないよ。』

『ほ〜。』と、絢子は笑つて、『ところが父さま、なか〜そんな様子は些つとも見ま
せんわ。』

『ほんどですわ、若い奥さんなんか、お持ちになる元氣ですもの。』 田鶴子も思はず
聲を出して笑つた。

それで暫らく會話が杜切れた。貞子は満らなさうに祖母の傍に坐つてゐたが、祖父の枕頭にあつたお菓子を貰ふと、それを持つて女中たちの方へ走つて行つた。

『俺もしかし、そんな人間を相手にして、口を利くのも大人氣ないでな。今度は一つ

何を措いても、此の負債は償却しようと思つとる。』と、敏之は心持ち疲れた上半身を脇息に靠れながら、不快氣な表情で、『で、同時に、島とはこれきり絶縁しようと思ふから、お前も其の決心をして貰はにやならん。』

『私が、あのう島から暇を取るのをごさいますか。』

『先方の出方が出方だからね、遺憾ながら然うするより外なからうと思ふが、お前の意見は奈何かの。』

『私?』と、絢子は暗い目色をして、『今のところ、私はそこまではまだ考へてはをりませんの。』

『お前が然う考へんでも、おア云ふ卑劣な人間の嫁としては、お前をあすこの家におくことは俺の良心が許さん。』と、敏之は動かせない色を面に現はして、父親らしい威厳をもつて然う言つた。傍にゐる妻の田鶴子も暗い表情をして、其の成行を氣遣ふやうに熟と首を垂れて聞いてゐた。絢子がごんな返辭をするかと思ふらしかつたが、其の眼前には直ぐ可愛い貞子のあごけない姿が浮かんで、彼女は祖母らしい憐憫の情に

惱むげに見えた。

絢子は暫らく沈思してゐたが、『お父さまが然う仰言れば、それは爲方がございませんわ。それに島の家風と、家の風は初めから違つてゐるのですから、私だつて是非あすここに、望んで行つた譯でもございませんもの。たゞ島から縁談のお話があつた時、色々あの經濟上の關係があるからといふことで、私も行くのが嫌でたまらないといふ程でもなかつたものですから……』と、それだけ言ふと、何だか父に不足をでも言つたやうな氣がして、絢子は急に口を噤んで了つたが、更に『然う云ふ譯ですから、私は孰らでも可いやうなものなんですけれどもね、金銭上の問題と違つて、さう輕卒に決める譯にも行かないでせうと存じますの。』

『うむ、それは俺にもよく解つてをる。』と、父親は頷いて、『ではまあ、今急に賛成は出来かねると云ふんだな。』

『まあ、然うなごさいますの。それに、貞子も居りますから……』
『しかしな、俺は今後島とは、途中で逢つても、口は利かんつもりだ。多分島もこれ

を言出すからには、二度と再び俺と顔を合はさん氣だらうと思ふ。』
『それあ然うかも知れませんが、お金の問題さへ解決すれば、島の舅は別に何とも思つてゐやしないだらうと思ひますわ。此の問題には、最初からそんな感情が加はつてゐるんぢやございせんもの。やつぱりお父さまの仰言る通り、たゞお金が惜しいと云ふだけなんでせう。私然う思ひますわ。』
『しかし、お前は不愉快に思はんか。』敏之の眼はぎらりと光つた。

四十六

『思はない段ぢアございせんわ、お父さま。』と、絢子は聲に力を入れて、『初めから私にはあすこへ行くことをね、餘り快いことゝは思つてをりませんでしたもの。』
『すれば、此際立派に離縁を取つて了つたら奈何か？』
『でもね、一旦嫁づいた上は、然う單純な譯にはまゐりませんわ。』と、絢子は素直らしい、そして、伶俐さうな目を輝かしながら、『それもね、島の父が私を憎んで……事

實憎んでゐらつしやるかも知れませんが……ひどく虐待でもするとか、公然暇を出すとかすれば、其の場合ね、また別問題ですけれど……。』

『しかし、今度の遣方などを見れば、お前を愛してをるとは思へんの。少しでも、お前を愛してをるとしたら、お前を苦しめるやうな無法なことは出来ない筈ではないか。』

『島の父のお腹の中は、私にも判りませんわ。或ひは憎んでゐるのかも知れませんが、ですけれどね、別段私を虐待したといふこともございせんもの。』

『左に右、お前もよく考へてくれ。俺としては、此上一日も娘をあの家へおくことを好まん。』父親も亦きつぱりと言ふのであつた。

『私、考へさして頂きますわ。』

と、絢子は努めて父の氣を鎮めるやうな調子になつて、

『私の問題は、當分別にして置いて頂きたうございますの。』

『お前が其の氣なら、俺も強てとは言はん。』

父親も無理に直ぐ怎うと云ふことも出来ないで、其儘黙つて了つた。田鶴子も此の場合何とか口を利かなければ悪いと思つたので、母親らしい優しい辭で、「貞子もあアして、今が可愛い盛りでございますからね。絢さんの身にもなつて見なければなりません。それに一度離縁を取りますと、またあとが心配なものですから……。」

「私、介意ひませんわ。さうなつたら、もう一生獨身で通しますわ。貞子さへ傍にゐれば……。」子供のことを母に言出されたので、絢子は張詰めてゐた心が急に弛んだやうになつて、自然に熱い涙が臉ににじんで來た。そしてぼたりと、一滴落ちた。

田鶴子は其のいぢらしい様子を見て、もう貰ひ泣きしようとする氣持を漸く熟と抑えた。敏之は直ぐと顔を外向けた。一座には重々しい沈黙の帳が下りた。

絢子にはいろんなことが、次から次へと考へ出された。今も言つた通り、もどく島冢へ嫁すのは、最初から好んでゐなかつたのである。愛なき結婚！ それもまだ可いとして、父と舅とが金銭上の都合から出來上つた縁談なので、彼女は初めから不快でならなかつた。しかし、家の爲、父の爲を思つてそれを承諾したのである。尤も婿

たるべき辰衛の人物が、舅のやうではなかつたので、彼女はそこに幾らか前途の光明を求めて行つたのであつた。表面幸福に過ぎた過去が思出された。それは矢張り表面のみのことであつた。まだ六年と経たない今日、早くも辰衛の心が動揺し始めて、舅との折合は一層面白くなつた。それも自分から出たことであるが、良人の疑ひは餘りに自分を信じない、一種の侮辱ださへ絢子は思つてゐるのだつた。

温泉場から歸つて來てからは、良人はもう二度と白井のことは言ひ出さなかつた。しかし、絢子に取つてはそれを言出される以上に、黙つてゐられるのが辛かつた。口へこそ出さないが、辰衛は始終何かを妻の眼から探らうと努力してゐるやうに見えた。殊更に自分の身邊に注意の眼を注ぐやうに、絢子には見えるのだつた。それが彼女には非常な苦痛だつた。從來にない辛さであつた。

「私は、奈何したら可いか知らん？」絢子は獨りで、心の中で苦悶し始めた。

親子三人が、互ひに心の中を探り合ふやうな遺瀨ない時間が、暫らく續いた。病室の空氣はさらでだに滅入つてゐるのに、三人の沈黙で、暗くなつて了つたやうに見え

た。田鶴子の口から思はず深い溜息が洩れた。

四十七

それから話がまた金の問題に移つて行つたが、絢子は、父が腹立まぎれにそんなことを言つても、二萬に餘る大金を右から左に返すことの出来ない實家の現状であることは、解り切る程解つてゐるのだつた。敏之の腹では、娘の離縁問題を持出せば、文平の方で降参して來るか、辰衛が何とか調停するだらうと思つてゐるが、それを口へ出すことは出来なかつた。で、結局母の田鶴子は、絢子に話をして貰つてはと云ふことを言出した。

絢子は自分の一番厭な役目が廻つて來たと思つた。それを舅に話すことは、自分として此上ない屈辱であり、不面目であると思つた。田鶴子もそれを娘に強ひるのは、如何にも忍びないやうであつた。で、後の辭を繼ぐことも出来ないで、そのまま沈黙に陥つた。

『さうね。』と、絢子は溜息を吐くやうに言つて、『それで、私がお話をするごしますと、奈何いふ風にしたら可いんでございませう。』

敏之は、其時間が來たと見えて、盆の上の薬瓶を取ると、ヨルクを抜いて、ごぼごぼと飲んだ。そして、苦い顔をして脇息に凭れたきり、黙つてゐた。初めの勢ひはもうなかつた。

『然うですね。』と、母が引取つて良人と娘を見比べながら、『何の端にも足りないけれど、こゝで千圓許りも拵へて、後はまた少しづつ、月賦とか、年賦とか云ふことにでもして頂いたら……。』

『連帯の方は？』

『それも適當な人を見付かり次第、名義を書換へるといふことにでもしなければね。今責任を釋けと仰言つたつて、然う急なことに行くものぢやありませんからね。』

『爲方がなければ、私口を利用してみますわ。ですけれど、島の舅の出方が少し意地悪のやうですから、私なんかの言ふことを聞いて下さるか奈何か、其邊は私にも自信が

とゞいてませんの。』

『お前に然う言はれると、何ですか心細いやうですけれどね、と云つて、それより外に手の著けようがありませんからね。』

『まあ、出来るだけ縫つて見ますわ。』 絢子の目の前には、自分にお辭儀をさせることが、感情上の復讐手段のやうに思つてゐるらしい舅の無知な顔が、あり／＼と浮かんで一層不快でならなかつた。

『眞實に濟みませんね。』 母親は氣の毒さうに、『それでなくてさへ、氣苦勞が多いのに、こんな厭なことでまで耳に入れて……。』

『逆も無駄だとは思ふが、』と、父親は漸と口を利いた。『一應は當つて見るも可からう。其代り、お前の言分に對して、無禮な返事でもするやうだつたら、直ぐ其場で縁を貰つて來るが可いぞ。恩義を知らんやうな奴に、ペコ／＼する必要はない。』

『其の場合で、結果が奈何なるか、私には判りませんが、なるだけ圓滿に納めたと思ひますわ。』

『それが何よりですよ。長いものには捲かれるで、もう我儘な人にかゝつては、此方が負けてゐるより外ありません。そのうちには又、好いこともあるでせうからねえ。』と、母親は訓すやうに言つた。

『先刻のお話の、千圓は確かに出來るでせうか、お母さま。』と、絢子は思出したやうに言つた。

『さあ、それもね、株でも賣つて了つたらばね。』

『それでは、後が困るでせう。』

『困る段ちやありませんとも。今ちや、株の配當が家の大事な収入なんだもの……。』それで、一座には又暗い沈黙が割込んだ。するとそこへ、絶えて久しい白井欽吾が訪ねて來たことを女中が報らして來た。

『珍しい男が來た。どうぞ、こちらへとお言ひ。』 敏之は眼を光らせながら言つた。

『まあ、白井さんが！』 母と娘は、思はず屈托さうに顔を見合せた。

と、そこへもう女中に案内された白井の黒縞紋付の羽織姿が、近づいて來た。

四十八

白井は久濶の辭を述べ、田鶴子にも絢子にも、其後の挨拶を交した後で、
『御容體は奈何ですか。』と、敏之の心持ち窺れた老顔を見た。

『いや、有難う。なあに何でもないんだよ。』敏之は無難作に、『時に奈何かね。役所の方も、昨今は閑だらうな。』

『いや、もう全く詰りません。何時までも腰辨ぢや、人間も駄目ですなあ。』白井は煙草の煙を愉快に吐きながら、快活に笑つた。しかし、入つて來た時の此の室の光景が何となく打ち沈んでゐて、三人の顔が言合はしたやうに、屈托さうに曇つてゐたのを思ひ出して、餘り無遠慮など思つたか、急に語調を落して、『絢子さんは、何日頃お歸りでしたか。』と、絢子の方を向いた。

『は、もうずつと前ですの。其節はいろ／＼と、お世話さまになりました。』
紙も有難うございました。』

『いや、私こそ。』と、白井は多少照れ氣味で、左の手で髯の邊りを撫でたりした。

『御一緒でしたつてねえ。まあ随分久し振りぢやございませんか。全く奇遇だつて、絢子の手紙にもありましたつて。』田鶴子も調子を合せるやうに、嫣然した。

『いや、腰辨も可いよ。』と、敏之はまだ先刻白井が自嘲的に言つたことを、話題に上せて、『俺のやうに浪人續きぢや、二進も三進も行かなくなるからなあ。まあ、官界でもさうやつて、地路に働いてゐるんだね。まだ若いから可いよ。』

『御冗談でせう。』白井も思はず笑つて、『腰辨なんかしてゐた日には、幾ら地路に稼いだつて、落ちは知れてゐますからなあ。まあ、せい／＼恩給くらゐなものです。全く官吏ほど詰らないものはありません。』

『なあに、然うでもないよ。だが、君等のやうな新進が出て、大ひに我が官界を振肅

してくれんぢや不可ないね。君が判官だから、手近の話として、裁判所のことを言ひたいが、今の裁判所の遣口ぢや全く、日本の將來が恥かしいくらゐだよ。何故つて君、だいち人間を捕まへて人民だなんて言ふのが、怪しからんぢやないか。ね、然うだらう。』敏之は微笑しながら、『俺も一時は官僚だつたが、此道に入つてからは全然、官僚の衣を脱ぎ棄てたよ。實際、今時そんな術は流行らないからなあ。』

『いや、御尤もです。』

『それに、今の裁判所は、勿論、昔は尙ほ甚だしかつたが、今でもだよ。今でも依然として、其の傾向が抜けないんだからね。だいち君、人間を道具扱ひにするよ。それが氣に食はん。若い辯護士連が人權蹂躪など、騒ぐのは、全く無理はないね。拘留する程のこともない被告人を、無雑作にぼん／＼抛り込む。そして、抛り込んだら最後、一年も二年も、未決に縛つておいて、てんで調べやしない。實際堪るもんぢやないよ。』

敏之の氣焰は、なか／＼盡きさうになかつた。田鶴子は又かと云つた顔で、些つと

立つて茶の間の方へ行つた。絢子は、修善寺で殆んど六年振に、自井と會つた時のことなどを懐しく思出してゐた。

『いや、一々御尤もの仰せです。検事も然うですが、一體此の豫審判事つてもものは、世間から恨まれるもんで……』自井も苦笑しながら、元氣だけはいつに變らないと、懷舊の情に打たれて熟と主人公を見た。

『君も、其の豫審判事なんかになるなよ。なるなら、大ひに多年の積弊を一掃するに努力し玉へよ。此の忙しい世の中に、未決の儘で一年も二年も縛られて堪るものか。俺は全國幾萬の未決囚のために、彼等に代つて訴へるよ。人間と云ふことを思つて貰はんけれあならん。ね、然うだらう。』

『はい、一々同感でございます。』

『はつは、恐れ入つたか。は、久し振りにメートルを上げたよ。』

『おほ、お父さまはまるで、御病人のやうぢやございませんわ。』

白井は無沙汰の詫旁々病氣見舞に來たのであつたが、もう時代が大分違うので、かうして久し振りに訪ねて來ても敏之とは話も合はず、しかも三人が三人浮かぬ顔をしてゐるので、いろんな世間話はしてゐながら、ともすると話が切れ／＼して、ばつが悪かつた。

其中で、絢子だけは自分の苦しい立場を打明けて、金銭上のことは別としても、此際女としての自分が、どんな態度を取つて可いかと云ふ高級な道德上の判断を、彼に仰ぎたいやうな氣がしてゐた。差當り彼を措いては、そんな身の上の相談相手になつてくれる者は、外に一人もなかつた。しかし此處ではそれを言出すのが、心に憚られて空しく時が移つて行つた。

するうち、來客が又一人あつたので、

『いづれ又ゆつくり伺ひます。』と、白井は暫らくすると帶の間の時計を出して見て、

暇を告げようとした。

『まあ好いちやございませんか。久し振りですもの。』と、絢子は幾らか狼へ氣味で訴へるやうな目をして、彼を引止めた。『これからごちらへか、行らつしやいますの。』

『いやそんな譯でもありませんが……。』

『私も今日はゆつくり、遊んで行かうと思つてをりますのですから、彼方で何か冷たいものでも召食つて、遊んでいらして下さいまし。』

『有難う。』と、白井が躊躇してゐるうちに、訪問者が入つて來たので、其儘彼はそこを引退つて、絢子に跟着いてすつと懸離れた舊の絢子の部屋へ行つた。

『もう此頃は、全然荒れて了ひまして、……此の家族には廣すぎて、手が届きませんのでございませぬの。』絢子は北向きの涼しい其の六疊へ入ると、自分で座布団などをそこへ直しながら、『さあどうぞ。私は此の部屋が一等懐しいんですの。』

『あなたの書齋へ入るのも、暫らくぶりですな。』と、白井も懐し氣に四下を眺めて、其の時分から懸つ放しの古い額などに注目してゐた。朱檀の机なども昔のまゝであつ

たが、主のゐない部屋は何となく淋しかった。

其のうち、絢子は女中にアイスクリームや、氷菓子などを吩咐けた。貞子もそこへ来て、白井にお辭儀をした。

『修善寺でお目にかゝつた小父さまよ、覚えてゐるでせう。』と、絢子が言ふと、貞子は嫣然として頷いた。

『今度小父さんの家へも、遊びにいらして下さいね。』

『有難うございますと、被仰いよ。』と、絢子は子供に教へると同時に、『あなたのお子さん方は、皆さんお丈夫でゐらつしやいますか。』

『はあ、みんな丈夫ですが、此頃は一ノ宮の方へ行つてゐます。彼地に友人の別荘がありますからね、家庭教師をつけて當分そこへ預けてをります。』

『まあ、それは可うございますねえ。その代りあなたはお淋しうございませう。』

『餘所から歸つて来て子供がゐないと、矢張り何だか、もの足りない氣がしますね。一兩日中に些つと見に行つてやらうかとも思つてゐるのですが……。』

『これから海は可うございますねえ。私も修善寺にゐるうちは、東京へ歸りたくて爲方がなかつたんですけれど、歸つてみますと、直きに又旅行がしたくなりますの。東京は煩さうございますね。』

『私なぞも旅が一等好きですな。此方の先生も、少し旅行をなさると可いですね。暑い盛りだけでも……。』

『近頃些つとも出ませんの。』と、絢子は眩しさに屢瞬いて、『まさか避暑くらの出来ないこともないんでせうけれど……父も一頃から見ますと、總てが何となく衰へました。經濟が苦しいから、氣の毒でございませうの。』

絢子の表情は、見る／＼暗くなつて来た。

白井は不思議さうに、『經濟が苦しいつて、そんなにお苦しい筈はないでせう。歴然として島家が付いてるぢやありませんか。』

『ところが、世間から然う思はれてをりますだけ、父は氣毒なんでございませう。現に今も問題が醸されてゐるくらゐなんですもの。』

『問題と云ひますと、何かやつぱり財政上のことで……』 白井は不安な色を浮べた。
 『はあ、然うなんでございますの、つまり父へ用立て、あつたお金を、島の舅が急に返せと然う言つてまわりましたの。』と、絢子は思ひきつて立割つた話の口をきつて、
 『兩家の古い關係は、あなたも御存じのこと、思ひますが、今から十年ほど以前に父は初めて其頃の厚誼に酬る爲だと言つて、貸すとも呉れるともつかずに、島の舅が融通したお金を受取つたんでございませう。それから私が嫁付きます前後にも少し宛一二度と、外に島が連帯の負債と、残らずで正味二萬五六千圓ばかりのものでございませうの。』

『それを、一時に返せと云ふんですか。』

『一時と云ふ譯でもございせんけれど……』と、絢子も要領を摘んで問題の内容を語ると共に、父敏之の苦しい經濟状態をも説明した。

『そんな譯ですから、私も傍觀してゐる譯にいかなくなつて了ひましてね。これから島の舅に頼んでみるつもりなんですけれど、それが私としては、いかにも辛い仕事な

んでございませうの。』と、絢子はふと氣が付いたやうに、『私を誤解なすつて下すつては困りますけれど、私こんな話をお耳に入れたからと云つて、決して金錢上のことで、あなたに御心配かける意味ではないのでございませうから……』

『解つてゐます。』と、白井は頷いて、『しかし、私も場合によつては……』

『いゝえ、それこそ私が豫めお断りしておかなければなりませんわ。それでしたら、この話は絶対に、あなたのお耳へ入れたくはないのでございませう。』

『解つてゐます。それで……』

『今申した私が間へ入りますについて、私が島の舅にいかにも口をき、たくない事情がございませうの。私は島の舅に絶るのが、残念で堪らないのでございませう。』

『それは残念でもありませんが、一應當つてみたら奈何ですか。』

『いゝえ。』と、絢子は目に涙をためて、『ですけれどもね、偶にお目にかゝつて、こんなお話をお聞かせして、あなたはさぞ御迷惑でございませうね。』

『いや、是非聞かして戴きませう、又何かのお役に立たないとも限りませう。』

『では、何も彼もお話いたしましたわ。良人にも母にも父にも、話さないことなんでしょう。』と、絢子は興奮の色を浮かべて、『つまり島の舅が、私を憎んでゐることがあるのでございます。怨んでゐると云つても可いかも知れませんわ。あの舅からね、良人の洋行中少し道ならぬことを言ひかけられたのでございます。』
白井は驚いたやうな顔をして絢子の顔を覗めたが、同時に絢子は耳の附根まで紅くなつて其儘俯むいて了つた。

『それで大概想像がつかしました。奈何です、一つ其事を御主人に打明けなすつて、御主人の御意見にお委せなすつては……』と、白井は明晰な男性的の聲で言つた。

『それを打明けたくないの、今日まで苦しんでゐるのでございます。私の舅に對する徳義心として……』

『さあ、その義理だが、道義上果して正當か奈何か、疑問ですな。』

『ですけれど、女の心持としてゐるの。私と云ふ一個の女の……』

『すれば止むを得ませんなあ。』

白井は思出したやうに荏を喫しながら、熟と考へるやうに俯向いた。

五十

『では、やはり女らしく、お母さまの御依頼ごほり、一つ島さんに當つて見るより外ないでせう。』白井は、思案深い目色をして言つた。

『そして、其の返辭次第で、また何とか方案を立てるんですね。』

『然うでせうか。』

『あなたに取つては、それは辛い仕事に相違ありません。しかし、島さんと云ふ人を、私が想像してみますのに、案外單純で無邪氣な人のやうにも思はれますね。』

『はあ、全くそれはね、然ういふ點はあるんでございますの。』と、絢子は微笑を浮かべて、『無邪氣とは言へないでせうけれどもね。』

『左に右、心理の働きの面倒くさいやうな人ぢやないでせうから、あなたが然う云ふ風に低く出て頼んでみたら、存外氣爽に承知して呉れるかも知れませんよ。』

「然うでせうか。私は何だか人情とか、理窟だとかでは、駄目のやうな気がいたしま
すわ。」と、絢子は絶望的な目色をして、「それにね、あア云ふ人は下手に出れば出るほ
ど、付上りはしないかと思ひます。」

「その點は、しかし實際に當つて見なければ何とも判りませんね。單にあなたたちを
苦しめるために、そんな問題を持出したものか、それともね、何か深い考へがあつて
やつてゐることか。あなたとしては此際自分の立場から考へて、最善の方法を盡すよ
り外ありませんまい。」

「それで私は、逆も生優しいことでは聞きさうもございせんから、少し強く出て見
ようかと思ひますが、奈何でございますか？」

「場合によつてゐすな。それで其の話の爲方は、無論あなたのことですから私が言ふ
までもありませんが、嫁としての立場、子としての立場から鳥さんの反省を求め
といふ風に、理義を盡さなければならぬのですが、それで聞かなければ爲方がない
です。此方のお父さんの方で、誰か確かな辯護士でも頼んで、交渉してもらうより外

ありません。勿論、辯護士を入れるからと云つて、直に法律問題に移す必要はありま
せん。兩家の間へ入つて、適當な調和策を講ずるんです。さう云ふ人間が他から入
ることになると、いくら我儘な鳥さんでも、さうく無理を通す譯には行きませんか
ら、何とか巧く話がつくに違ひありません。其の辯護士については、私にも少し考へ
がありますからね。その場合には、又御相談申し上げませう。其の男を頼みさへすれ
ば、屹度圓滿な解決を見るだらうと思ひます。」

絢子の顔色は、見る／＼晴々として來た。

「何分、どうぞ宜しくお願ひいたします。ほんとに御迷惑な問題を持ちかけて、あな
たには濟みませんですけれど……。」

「いや、私としても、そのくらゐのことはする義務があるんですから……。」
「いゝえ、それどころぢやございせんわ……。あのう父はね、何かなし離縁を取れ
ど、然う言ふんですけれどね。私一個としては、此の問題と終始すると云ふ譯にもま
りませんの。それかと云つて、傍觀してゐる譯には尙更まゐらないのでございます。」

奈何すれば可いか。ほんとに困つて了ひまして……。」

『御尤もです。私も餘所事とは思ひません。不及ながら出来るだけ、御相談相手になつて見ませう。』

『はあ、有難うございます。』と、絢子は叩頭をして、『私としては、島から暇を取りさへすれば、それで問題が解決するものならば、いつでも出てまゐりますわ。ですけれど、逆も然う單純には行かないのでございますもの。』

『然うですとも。』と、白井は頷いて、『あなたの進退は、此際一層慎重にしなければなりません。双方の親を思ひ、良人を愛し、子供の前途を考へる……あなたが無知な女であれば左に右、さうでない以上はね、輕卒なことは出来ません。』

『眞實でございますわ。』

『それでは、其の結果を些つと知らせて頂くことに……。』と、白井は些つと時計を見て、『いづれまた此方へ伺ひますから……それとも、お手紙か電話か頂けば……。』

『ごうもお忙しいところをお止めしまして、こんな勝手なことばかり申しまして……』

……と、絢子は心から感謝するやうに、『事によると私些つとあなたのお宅へ、お伺ひしますかも知れませんが。お差支なければ……。』

『それごころちやありません。ごうぞ入らして下さい。』と、名刺を一枚取出して、『それに、電話番号も記してあります。』

絢子は名刺を受取つて、『ごうも有難うございます。是非伺はせて頂きます。』

『は、ごうぞ。』と、白井は匙で冷たい紅茶を攪拌しながら、『私も何時々までも、現在の所に奉職してゐるつもりはありませぬので、事によると實業界へ入ることになるかも知れません。是非来いと言つてくれる向もありますのでね。それに爲事も有望ですから、行つて見ようかとも思つてゐるんです。』

『あなたも實業家に、おなりなさるんでございますか。』

『實業家と云つたところで、私のは金が目的ぢやないのです。落行先はやはり政治なのでしてね。實業は單にその手段に過ぎないのです。』

『眞實ですね。』と、絢子は感心したやうに、『實家の父などは、一生政治で身を果した

やうなものですわ。經濟の觀念がないから駄目でございますわ。」

「然うでもありませんまいが、一つは時代ですな。昔は金を出す奴と、政治家とは全然別だつたものですが、今はさうは行きません。」白井は苦笑を浮かべながら、「私も實業界へ入ることを……つまり、今勧められてゐる會社へ入ることを承諾すればね、少しぐらゐの金の融通は利くのです。さうなると、自然あなたの問題に立入る資格も出来る譯です。とかく金本位の問題ですから……。」

「またあの人たちは、金より外に威張れるところはないのですからね。」

白井は少し更まつた辭になつて、

「そんな風ですから、餘り御心配なさらない方が可いですよ。」

「はあ、有難うございます。」と、絢子は感謝に満ちた眼を俯せたが、直ぐ顔を上げて、

「あなたにそんな御心配までかけては、大變ですわ。私、一生懸命骨を折りますわ。」

「まあ遣つてごらんさい。では私はこれで……先生にはお暇申しませんから……。」と、白井は布團から退つた。

「然うですか。では、些つと母を……。」と、絢子は急いで母の田鶴子を呼んで來た。

「母さま、私ね、白井さんにいろいろ好い智慧を貸して頂きましたわ。お禮を言つて頂戴。」

「然うですか。」と、田鶴子は挨拶に困つたやうに、白井の顔を眺めてゐた。

「みんなお話して丁ひましたわ。可いでせう。でもね、それはお金のことぢやないんですわ。」

田鶴子は、泡を食つたやうな面持で、

「何分、どうぞ宜しく……。」

白井は軽くそれを受流して、やがて暇を告げて玄關口へ出ると俣で歸つて行つた。

絢子は此間から、自分獨りの頭にかゝつてゐるやうな這回の問題について、辰衛の少しも頼りにならないことをもの足りなく思つたが、それが偶然に白井によつて、自分の行くべき道を開拓して來たやうな喜びを感じた。そして、白井がどれだけ自分に對して、同情と寛容とをもつてゐてくれるかを考へて、心から感謝せずにはゐられな

かつた。

『私、その方にいろいろ言はれて、自信が出来ましたわ。』
部屋へ歸ると、絢子は晴れぐしした顔をして母親にかう言つた。
絢子は白井の言つたことを、しかし皆なまで母親には明かさなかつた。白井を信じ
てゐるものは、自分の外にはないと彼女は思つた。

舅の胸

五十一

其の晩、番町の家へ歸つた絢子は、良人にも其の事を話して、舅に當つて見ようと思つたが、文平は二階座敷でお須磨を相手に酒を飲んでゐた。お須磨は傍に附つきりだし、お須磨を世話した大久保や、それから此頃ちよく／＼遣つて來る大久保の女房まで來てゐて、三味線を弾いたり歌を謠つたり、陽氣な笑ひ聲や浮いた話聲などが、

間斷なしに聞えて來た。勝手には絶えず岡持が持込まれて、女中たちは酒のお煙や何かに忙殺されてゐた。で、迎もそんな込入つた話を持込むどころの騒ぎではなかつた。絢子は爲方がないから、又の折を待つことにした。

『所詮駄目だらう。』

良人の辰衛は、一臂の力を假さうとでも言ふことか、頭から文平を怖れてゐて、意氣地がなかつた。そして、のつけから悲觀説を提出した。

『お前が自身に當つてみるなら、見ても可いがね、言出したら後へは退かない親父の氣性だからね。』

辰衛はさうも言つた。そして、

『お前の實家の安危に關することだから、俺も何とか出來れば爲たいと思つてゐるのだが、今のところね、手のつけようがないんだ。父は此頃すつかりお須磨に巻かれて了つて、調子が少し狂つてゐるんだから……。』

冴えた三味線の音が、夫婦のゐる。洋館の方へも流れて來た。二人は、其時晩餐後

二階へ上つて、露廊へ椅子を持出して涼しい風に吹かれてゐた。

『私が言つたのでは、尙ほ駄目でせうけれど、一應はお願ひして見るつもりですわ。』
絢子はそれ以上、辰衛に詳しい話をしようとは思はなかつた。舅に對して此の問題については、彼女は少しの自信ももたなかつた。しかし、良人が餘りに冷淡なので少しは反抗心も手傳つて、厭でも當つて見ねばといふ氣がしたのであつた。それに母親の願ひも反古にはされなかつたので……。

『俺の洋行前は、あつちの家も淋しいものだつたが、此頃は全然で世界が變つたやうだ。』

『あれも好いでせう。以前のやうに淋しくつては、お舅さまがお氣毒ですわ。』
それで暫らく夫婦の會話は杜絶したが、暫らくすると、辰衛は、

『それで、親父がお前の頼みを肯かないとしたら……。』
と、また話はその方へ移つて行つた。

『然うなれば、實家の父の方にも、何とか考へがあるでせうから……。』

『他に融通の方法でも、ありさうなのか。』

『それは、奈何だか判りませんけれど、何とかなるでせうよ。』

『然う樂觀してゐられるやうなら、可いがね……。』辰衛は溜息を吐くやうに言つた。
すると、其時階下の方で遽かに浮いたお須磨の聲がしたと思ふと、やがて其の思ひきり派出な姿が二階へ現はれた。

『御免下さいませ。』お須磨はさう言つて、部屋の中を覗いた。そして、つか／＼と露廊の方へ出て来て、『おや、そこにいらしたの。ちと彼方へも入らつしやいませんか。』

『は、有難う。』絢子は應へた。

『何だか莫迦に陽氣ですね。』辰衛は空笑ひをして、『まあ老人の席へは、あんまり若い者は行かない方がいゝでせう。』

『あんな皮肉を言つてゐらつしやる。』と、お須磨は酒の氣があると思つて、調子が一層媚めてゐたが、絢子がゐるのも憚らず、辰衛が掛けてゐる後へ廻つて、椅子に手

をかけながら、『さあ、入らつしやいよ。老人ばかりぢや淋しくつて、いけませんから。』

『いや、今晚は失禮します、私なんかは、そんな席へ出る柄ぢやありません。』

『たんと仰言いよ。奥さんの前だと思つて。』お須磨は嬌垂れかゝるやうな、じ

やらくした風を見せて、『貴方は聲が美いから、屹と唄がお上手よ、ねえ絢子さん。』

絢子は、餘りにはしたないお須磨の態度に不快でならないので、見て見ぬ振をしてゐたが、さう聲をかけられて黙つてもゐられず、

『えい、ベースがね。』と、爲方なし浮かぬ返事をした。

『ほい、ベースだかべールだか、そんなハイカラなことは、私は知らないけど、些と長唄でもお始めなすつては奈何？ 失禮ですけど、私が教へてあげますわ。屹とお上手になりますよ。』

お須磨は少しはさうした道も覚えはあるのだが、まだ人に教へる程ではなかつた。しかし、酒の氣嫌と、それから豫て辰衛に近付かうとしてゐる思ひが現て、つい

そんな自慢まで出て來るのであつた。一つはさうした機會から、もつと深く辰衛の心の中へ、食入らうとする下心もあつたので。

『有難う。また其のうちに。』と、辰衛は有難に氣耻かしくなつて椅子を起つた。

すると、そこへまた、『奥さま〜』と、大きな聲で呼びながら、大久保の女房のお

初が上つて來た。

『まあ、お須磨さん、何してんの、旦那がお待兼ねよ。早くお伴れ申したら奈何？』

お初はヴェランダの入口に突立つて、にや〜笑つた。

『何してゐるつて、しごいわ。これでも大變勤めてるのよ。なか〜御本尊がね、お動

き遊ばさないから、おほい〜』と、お須磨は一層連葉に笑つて、『ねえあなた、また

お迎ひが一人來たんですから、よつ、是非いらつしやいよ。ね、いでせう？』

『ほんとに、奥さまも奈何でございます。あちらもなか〜お涼しいんでございます

よ。』お初は絢子の方へ寄つて行つて、荐りと侷めた。

『え、有難う。私今夜は少し頭が重うございますから、どうぞお介意ひなく。……こ

れで失禮さして戴きますわ。』絢子も椅子から起つて、『あなたは行らしたら可いでせう。お二人が折角お迎へにいらしたんですから……。』と、辰衛の方を向いた。

『俺も厭だね。』辰衛は苦笑して、また椅子に腰を落した。

『まあ何ですnee、御夫婦で申合したりなんか。』お須磨はまた辰衛の椅子にすつと寄つて、『それに、あなたは、まあほんとに、おほい、奥さま孝行nee。』

『ほい、ほい。』お初も、年甲斐なく笑つて、『そんなにお嫌ひにならなかつて、宜しいぢやございませんか。偶には奥さまとね、少しくらゐ離れていらしても、宜しいでせう。』

『さあ、いらつしやい。ね、絢子さん、ぢや旦那だけ。ね、いでせう、暫らくお借り申します。ほい、ほい。』お須磨はぶしつけに、辰衛の左の手を取つた。

『困るなあ。』辰衛は些つと顔を曇らせたが、苦笑しながら、ちらと妻の方を見た。

絢子はもう口を利くのも汚らほしいと思つたが、嫉妬と見られるのも厭なので、

『ほんどに行つてゐらつしやいませよ。私だけ失禮しますわ。』

『さあ、お許しが出たんですから、いらつしやい。』

がやく言ひながち、遂に辰衛は二人の女に引張られるやうにして、階下へ下りて行つた。無嗜みな笑ひ聲がまた階下でした。絢子は大風の引いた後のやうに静かになつたヴェランダに一人取残された。彼女は厭な氣がして、後を見送りもしなかつた。

一人になると、今まで良人と對座して話してゐたことが直ぐ頭腦に浮んで、絢子は今更のやうに、自分の良人の頼み甲斐のないのを思つた。しかし、これで本當の辰衛と云ふ人に會つたやうな氣がした。今まで四五年間の良人は、別の良人で、今夜の辰衛が本當の自分の良人のやうに思はれて來た。

『あ、私、やつぱり獨りだわ。』

絢子は吾にもなく溜息を吐いた。

五十二

其の翌日、辰衛が八時頃に會社へ出勤してから、絢子は化粧室で些つと髪のかせを

直したりしてゐると、窓の外に貞子と文平の聲がしたので、彼女はふと顔を出して見た。西洋草花の植つた花圃の間を、舅は孫娘に何か話をしかけながら、ぶら／＼と歩いてゐるのだつた。丁度乳母のお篠の姿もそこらに見えなかつたので、好い折だと思つて、絢子は急いで身仕舞を済して直ぐ庭へ下りて行つた。そして、それとなし貞子の傍へ寄りながら。

『おや貞子さん、そんなところにゐたの。』然う言つて、舅の方へ注意深い眼を配りながら、『お早ようございます。』

『お早う。』

文平は白地の單衣に金紗縮緬の兵兒帯を締めて、涼しげな花圃の中に立つてゐながら應へた。

『貞子も此頃は、大分舌が廻るやうだが、これから目が放せん。』

『は、なか／＼おしやまさんでございませうから。』と、絢子は言つて、『あのう、お舅さまに私、些つとお願ひがございませうですけど、後ほど些つと……。』

『何だ。』と、文平は幾らか眉を動かしたが、恍けたやうな目容で、『此處では言へんことなのか。』

『何處でも宜しいのでございませうけれど、少し折入つてお願ひしなければなりませんのですから。』

『然うか、それぢや俺の方へお出で。』と、文平は歩き出さうとしたが、『多分、お前の實家のことなんだらう。』と、苦笑した。

『は。』と、絢子はぎくりとしたが、しかし、嚴かな聲で言つた。

『その話なら俺が聞くものはない。あれは全體小倉の考へで、俺もあの男に委しておくのだから、若し話があるなら、あの男にした方が順序ではないかな。』

『然うでもございませうが、そこを何とかお舅さまのお心持で……。』と、絢子は押し返して言つた。

と、文平は些つと躊躇したが、透かさず、『お前も知つてゐる通り俺は煩いことが大嫌ひでな。問題が問題だからね、近來は自分の仕事の外は、細々した事務は一切人委

せにしてをるのでな。』

『はあ。』

『澁谷の家の方のことも、俺はあれきり放擲つてあるので、奈何いふ風になつてをるか、一向知らんのだよ。』

『さやうでございませうとも。』と、絢子も抜け目なく、『高があれだけのお金の問題でございませうから、お忙しいお舅さまが然う一々ね。』

『まあ、然う云つたやうなことでな。』と、文平は苦笑して、『しかし、また委されたもの、身になると、例ひ百圓の金でも、十萬二十萬の金でも、つまりは同じことで、どうも帳簿の整理が付かんからね、何とかして戴かんでは大きに遣りにくいと云ふやうなことで、些つと其の話はあつたよ。』

『では、何でございませうか。全くあの方の専断でもございませんで……。』

『専断とも云へんが、そこは小倉も人情を知らん人間でもないからな、何とか圓滑な話になつてをること、俺も信じてをるので……。』

『左に右、立話も失禮でございませうから、些つとでもお内へ入らして下さる譯には、まわりませんでせうか。』

『さう、行つても可い。ぢやあ行かう。しかし、何處でしても話は同じだよ。』文平は日本間の方へ歩き出した。

『それは然うですけれど……。』と、絢子も貞子をお篠に託けて、舅の後から跟いて行つた。

二人は間もなく、奥まつた八疊の室へ入つて行つた。

文平は、次の室の棚の上にある置時計を覗くと、『俺も今朝は用事があるので、さう長くも相手はしてをられんが……。』と、呟きながら、布団の上に乗つた。

五十三

部屋で差向ひに坐ると、絢子はまた憎いほど平氣である舅の態度が、怨めしくも面憎くなつて、同時に何となし口惜しさが先に立ち、急には話を進めることも出来ない

のであつた。しかし、そんな女々しい感情は別として、言ふだけは言はなくはならないと、我と我が必を勵まして、『唯今伺ひました通り、お舅さまの方では、それは煩いことには違ひございませんでせう。けれど澁谷の父の申すことも、亦た一理あるかと存じますの。』

『澁谷のお父さんは、それあ何と言ふてをられるか知らんが、左右理窟といふものは借りた方にも貸した方にも、それ相當に有るものでな。』と、文平は靜かに煙草に火を點けて、『殊に借りた方の身になると、言ひたいことが澤山あるもので……つまり、それが身勝手といふものだ。』

『いゝえ、理窟ぢやございませんの。事實なんでございます。』

『事實？』文平は微かに灰色の眉を動かして、『事實は、極簡單だよ。』

『父から申しますと、お舅さまとの關係はつまり金錢以上だと申しますの。島のお舅さまが、若し毛碌されたのでない以上、二萬や三萬のお金の問題を、今になつて御請求なさる理由が解らないと、申してをるのでございますの。』

『それはまた、奈何した譯かの。俺の方から言ふと、さう言はれる澁谷のお父さんの方が、餘程著けてをると言はんけれやならん。現に金の請取も、禮狀も俺の手許にあつてみれば。』

『それは然うですけれど、それにはまた父として、それだけのことをして戴く、有形無形に十分の理由があると申しますのでございます。私は、そんな古い御關係は存じませんけれど、父の氣性から申しますと、そのくらゐのことは、あつたかとも想像いたしますのですけれどね。それかと云つて、そのために債務がないと申すのではございませんの。拜借したものは、何處までも拜借したもので、お返しをしなければなりません。父としても、そのくらゐの大金を戴ききりと云ふ、そんな腹は少しもございませんのですけれどね。そこが、つまり父の苦しいところでございます。』

絢子は、些しも臆するところなく言つた。ちと言過ぎると思つて、はつとしたこともあるが、舅がそんなことには平然としてゐるので、彼女はまあよかつたと胸を撫下したりした。

『いや、其の點は俺も解つてをるつもりだよ。だから今日まで、一度も催促をしたこともなければ、口へ出したこともなかつた。澁谷のお父さんも俺なぞとは違つて、潔白を看板にしてをるくらゐの人だで圖々しい人ではない筈だと思ふからこそ、俺も寛大に見てはをつたれれど、それでは際限がない。止むを得ず……それもな、小倉がいろ／＼整理上の都合で、今度のやうな請求をした譯で、悪く思つて貰つては困るよ。山村さんも、あの際の金は是非返すからといふお言葉もあつたくらゐだで、今俺がそれを請求したからと云つて、眉に火がついたやうに周章る筈もなからうと思ふがね。』

『さう伺へば、一應御尤もでございますけれど、この問題は奈何か、今少し人情に基いたお話にして、戴きたいと存じますの。』

『すると、何かの、俺が不人情だとも言ふのかな。』

『いゝえ。』と、絢子は思はず目を落して、『さう仰言られると、私も御返辭の爲様もございませぬけれど、つまり澁谷の家の實情に基きまして、何とか寛大な取計らひが願はれますことなら、大變結構なのでございます。』

『すると、何かの、負けてくれろとも言ふことになるのかの。』 文平の眼がぎろりと光つた。

此處ぞとばかり、絢子は自分の心に鞭ちつ、一膝乗出して、きつと舅の苦い顔を見た。そして、靜かに言出した。

『負けて戴くと申すよりかも、御存じの通り父は長い間の浪人で、それに此節は健康も勝れませぬものですから、家の經濟は年一年と苦しくなるばかりなのでございませぬ。ですから、此際一つ御寛大な取計ひを願つて、何の端にも追付きませぬけれど、あのう、千圓ばかりもお返しをしまして、後はまた少しづつ年賦にでもして、お返しすることでもして戴くより外、奈何にも爲様がございませぬのですの。』

文平は相變らず六かしげな氣色で、『いや、然ういふ具體的の話になつてくると、何が何だか俺にはとんと判らんで、一つお前から小倉にでも當つて見ては奈何か。』

『それは然うでもございませうけれど、でもねえ、お舅さまのお考へ一つで、奈何にでもなることなのでございますから。』

『どころがな、然うは行かんのだよ。お前も知つてゐる通り、經濟が大きいだけに、主人が二々目を通すといふ譯にも行かなければ、また實際主人の思ひ通りに行かない場合もあるのではな。今俺が、そのことに口を容れて干渉するとなると、一事が萬事でな規律が立たなくつて、今後小倉が何かにつけて、大變に遣り難いことにもなるし、俺も困る。しかし、折角のあれだから、一應はお前の意思を通じてもおかうが、それ以上のことは、何分俺には爲かねるのだ。』

『然うでございませるか。』絢子の顔色はまた段々と暗くなつて來た。

『何か、大變俺が頑固なことを言ふやうだがね、どうも爲方がない。』

『いゝえ、そんな譯ぢやございませんですけれど、間に立ちます私が、本當に苦しいものですから、ついお舅さまにお絶りするやうなことになるしますのでございませう。』

『折角だが、どうも致し方がない。悪く思ふて貰つては困るよ。』

絢子はまだ一言ひたいことが、胸に一杯悶えてゐるであつたが、舅が初めからこの話に應じないと決めてゐるらしいので、そんなものに彼之理窟を言ふだけ無駄だと

觀念したのであつた。それに、話を破裂にまで持つて行つて、文平の人格や心理にまで立入つた批判をすることになれば、自分の進退から決めてかゝらねばならない。さうするには未だ間があると、彼女は思つた。そして、今はその時機ではないと考へたので、もうそれ以上絢子は何にも言はないことにした。

『では、これ以上申上げる餘地はないやうでございませうから、もう何にも申上げますまい。實家の安危に關る問題でございませうから、お願ひが出来ますことならば何とかして、小倉さんの手を弛めて戴きたいと存じましたのですけれど、然う云ふお話では、思ひきるより外ございませぬ。』絢子は屹とした態度で言つた。

『小倉は奈何いふ氣でをるか、そこは俺にも判らんが、まさか山村家を打潰す考へでもあるまいでな。そこはまた何とか、其のうち話が付くだらう。お前は心配せん方が可い。』と、文平は前よりか幾らか緩和の色を浮べて言つた。

『でもね、あの方だつて、たゞ一時の興味で私たちを苦しめて見たいと云ふ、そんな惡戯をなさる譯もございませんでせうからね。』絢子はさう言つて、皮肉な笑ひを浮

べた。

『その邊は、俺にも判らん。まあ成るやうにしか成らんで、暫らく成行を見たら可からう。』

そんな話の最中に、先刻からお須磨は二度もそこへ顔を出したが、話の切れ間もないので、黙つて引込んで行つた。すると、此時文平に來客があつたので、彼女はそれを報らせに入つて來た。

『あつちへ通してくれ。』然う文平は言つて、そして、直ぐ絢子に、『では、これで……』と言ひながら座を起つた。

總ての努力が水泡に歸した絢子は、黙つたなりで、下唇を噛みながら、鼻の後姿を睨むやうに熟と見送つた。眼からは、熱い涙がはらりと流れた。

二人の秘密

五十四

『御心配でございませぬね。』文平の後に跟いて行つたお須磨は、何と思つたか片付物でもするやうな風を装ふて、またそこへ來て、何時にない澄した調子で絢子に然う話しかけた。

絢子は此の場合、自分の問題をお須磨づれの耳に入れるのは厭であつたが、さう言はれると黙つてもゐられなかつた。氣取られないやうに涙の顔を手早く拭いた彼女は、心持ち外見加減になりながら、

『有難うございます。ごうもそんだお邪魔をいたしましたして、済みません。』

『いゝえ、私こそ何のお力にもなりませんでね。』

『奈何いたしまして……あなたにまで御心配かけては、済みませんわ。』

『私が口を利いて可いことならば、それは幾らでも利きますけれどもね。何ですか大分込入つたお話のやうでしたから、わざと差控へてをりましたの。』

『もう古い歴史のある問題なんでも、私がまだ何にも知らない時代からのね。』と絢子は淋しく笑つた。

『まあ、然うですか。』と、お須磨は浮いた調子で、『やつぱり、お金のお話でございませう。』

『まあ、然うなんですけれどね。』

『お金の話くらゐ、厭なものはいけませんね。』お須磨は鼻頭に輕蔑の色を浮かべて、

『ごごも然うなんですよ。お金のためにお終ひには親しいなかも、仇敵のやうになつたり、何かしましてねえ。』

『然うですなえ。』

『私の父なども、一時随分盛んにやつてゐたものですから、ちよく／＼人達にお貸したお金が大分ございましたの。それが一つも返つて來ないくらゐなら、まだしもです

けれど、今落目になつても、誰一人ねえ、寄り付いてくる者もありませんのよ。』

『然うですかねえ。』と、絢子は低聲で應答へをしてゐたが、肚があつてそんな事を言ふのか、それとも不用意に出た辭なのかお須磨の心が些つと解らなかつた。

『まあ、今日も快いお天気ですこと。』など、言ひながら、やがてお須磨は、文平の居間の方へ行つた。

絢子もそれを機に起つて、自分の住居の方へ歸つて來たが、折角屈辱を忍んで言つたことも、舅の方へ何の感應もないとなると、自分の力では奈何することも出來ないと思はれた。

彼女は獨りでも思ひに沈んでゐたが、漸と心を取直して、澁谷の實家へ電話で、簡單にそのことを報らすと同時に、牛込の白井の方へも、交渉の結果を報告しようと思つて、電話をかけてゐたが彼は不在であつた。

『では、あの今日四時頃お歸りの時分に、些つとまたおかけしますから。』絢子は然う言つて、電話口から離れた。

その時刻に、絢子はまた書生の小山に電話をかけさせてみると、丁度白井が歸つて来たところだと云ふので、彼女は些つと今日の結果を話すと、白井も惘れたやうな調子で、

『驚きましたな。私は無論好いこと、思つてゐましたが。餘程片意地なお爺さんだと見えますね。』

『私も、今となつては後悔してをりますの。何れお目にかゝつて、お話しいたします。此上は恐れ入りますけれど、あなたのお力をお借り申すより外ございませぬわ。』

『では、昨日お話ししたやうな方法で、左に右一つ御相談してみませう。』

『はあ、是非どうぞ……。』

『直ぐ來られますか。』

『これから直ぐお伺ひいたします。』

『では、お待ちしてをりますから……。』

それで電話を切つて、絢子は直ぐ支度をして家を出た。出かけにお篠と、それから

玄關まで送つて出た小山に口止めをして、わざと俤にも乗らないで、彼女は急いで往來へ吸込まれるやうに出て行つた。

五十五

『お前、誰にも奥さまのことを言つては駄目よ。』 お篠は玄關から引込みながら、甥の小山に更めて注意した。

『えい、大丈夫です。』と、小山は叔母に安易を與へるやうに、はつきりと言つた。そして、玄關脇の自分の部屋へ入つた。

此の小山はお篠の甥に當る青年で、お篠が絢子に付いて島家へ來ると、間もなく引取られて彼も此家へ來たのであつた。勿論、絢子の同情心から出たことなので、書生とは云ふものゝ、外の召使とは大分譯が違つて、絢子は何彼と彼の面倒を見てやつて來た。良人にも頼んで、夜間は學校へも通はして勉強させてゐるのであつた。此頃は暑中休暇になつてゐるので、彼は學校へは行かずにゐるが、絢子の厚意に酬ゆるため

に、人並の勉強は自身でも怠らなかつた。叔母のお篠と共に蔭になり、日向になりして、絢子のため忠實しく奉仕してゐるのであつた。それがまたお須磨には面白くなかつた。お須磨はごうかして、一人の味方を拵へようとしたが、仲働のお兼くらゐなもので、この小山に對しては奈何してもそれが出来なかつた。お篠は年寄で、頑固だから有繋に彼女には齒が立たなかつた。しかし、小山はまだ若いし、素直だから何とか自分の方へ傾けさせることは出来ると思つてゐた。たゞ機會が今日までなかつたのであつた。ところが、其の機會が彼女の前に來た。しかも今日來たのである。

といふのは、お須磨が母家の 厠へ行つた序に、些つと庭へ降りて見た時である。裏木戸のところで、書生の小山が誰か若い女と、馴々しく話をしてゐるのが、ふとお須磨の眼に止まつたのであつた。

『おや。』と思つて、お須磨は好奇の眼を睜りながら、奈何するかと熟と見てゐた。女は十八九くらゐの、些つとハイかつた娘であつた。見たところ小山は大分何か困つてゐるらしい様子をして、腕組したりなぞしてゐた。

『まあ、あの溫和しい小山が、奈何してあんな女にひつかゝつてゐるんだらう？ 人は見かけによらないものねえ。』

然う思つて、お須磨は尙も自分の姿を氣取られないやうに、瞳を凝らして何物をも見落すまいとした。小山は家の方を氣遣ふらしい。始終不安な目色をして、此方を見い／＼してゐたが、やがて女を納得させたものか、女は後に思ひが残るやうな様子をして、小山に別れて行つた。

小山は急いで木戸口を離れると、迂散臭く四下を見廻しながら、玄關の方へ歸つて行つた。お須磨は獨りで何か頷きつゝ、これも周章へたやうに急いで廊下へ上ると、一足先に玄關へ出て行つた。

それは、絢子が白井の方へ出かけて行つてから、凡そ一時間ばかりしてからであつた。玄關脇の自分の部屋にゐた小山は、ふと思出したやうに起つて、庭へ下りて行つたのであつた。それは人を待つ心持であつた。彼は裏木戸の方へ行くと、先に待つてゐたらしい其の女に會つたのである。――

「小山、ぼかあん！」

横合からひよいと白い顔を出したお須磨は、娘のやうな素振をして笑つた。

「あつ！」 小山は出合頭に脅かされたので、思はず吃驚して、そこへ突立つた。

「まあ、何ですnee、其の顔は？」 お須磨はまだ可笑しいといふ風に、小山を打つ真似をした。

「まあ、お前さんもお安くないわねえ。初めて知つたわ。おほ、おほ。」

「何ですか。」 小山はぎよつとしたが、素知らぬ顔で言つた。

「まあ、まだあんなことを！」 お須磨は眼で睨むやうに、「隠したつて駄目よ。そら、其の顔に書いてあるわよ。」

小山は吾にもなく、手で頬を撫でた。

「今の女は何に？ え、小山。」と、お須磨は相手の顔を穴の開くやうに見入つた。

小山は些つと暗い目色をしたが、悦けた調子で反問した。

「今の女つて、何でございますか。」

「あら厭な小山だこと！ まだそんなこと言つてるの。」と、お須磨はだらけたやうな

笑ひ方をして、「人が知らないこともつて、好い加減にお爲なさいよ。」

小山は真赤になつて、差俯向いた。

「あれは、一體ごこの女？」

「つまらない者です。」 小山は低聲に應へた。

「まさか、お前さんの身内ぢやあるまいね、妹とか従妹とか……。」

「そんな者ぢやありません。」

「ぢや大概解つた。」

「は。」と、小山はまた真緒になつた。

「私、今ね、何の氣もなしに庭へ下りると、ふとあの女の姿が目についたのよ。何だか見馴れない女だけご、お門違ひでもして、お前さんに訊ねてんのかしらと思つて見てゐると、何だか餘程睡まじい仲だと思つて、馴れ／＼しく話してるぢやないの。」

「恐縮です。」と、小山は頭を搔いて、「奥さまのお目に入つた以上は、爲方がありません。」

んが、ごうか誰方へも……。」

『えい、それお誰にも言やしませんとも、そのかはり私にだけはね、話してもいいでせう。』

『しかし、奥さまにお話するやうな、そんな者ぢやございません。』

『だつて可いちやないの。お前さんは、これまであんまり道樂をしたといふことも聞かないけど、そんな女があつたのかと思つて、珍しいぢやないの。女が訪ねて来たつて介意はないわ。で、今はもう關係のない女?』

『今も以前も、別に私は關係があつた譯ぢやないのでございます。たい私の友だちが暫らく關係したといふに過ぎませんので。』

『さう、そしてその女が、お前さんのどこへ何しに来たの。』

小山は躊躇したが、『それは、少しお應へし兼ねますの。』

『それ御覽なさいな。悦けたつて駄目ですよ。一體お前さんは御主人に監督されて、謂はゞ謹慎してゐる身體ぢやないの。勿論篠やの甥だから、絢子さんが目をかけてゐ

るんだから、私だつて主人といふ點では變りはないんですよ。』

『はつ。』と、小山は何だか大事になりさうなので、おどくした様子になつて、顔も碌に上げ得なかつた。

『その主人の私に、嘘を吐いても可いと思ふの。』

『いや、決して……。』

『そんなら、何の用で来たんですよ?』

小山は、爲方がないと云つた顔色で、

『では申上げます。實はあの女に私が少し金の借があるんです。』

『へえ、そして、それを催促に来たの。』 お須磨は少し期待を裏切られた表情で、それでも熱心に追及した。

『いや、催促といふ程でもありませんが、親が病氣をしてゐるから、少しごうかなるまいかその話に来たのです。勿論、電話や手紙で、二三度そんなことを言つてまゐつたのですが……。』

『ちや、其のお金を今日取りに来た譯なのね。』

『まあ然うなんです。しかし、遣りませんでした。私に金のありやうは、ありませんから……それでなくとも、私は一切あんな者と交渉を絶つゝもりですから。』

『それなら、尙のこと遣ればよかつたぢやないの。』

『はあ。』

『ことによつてはね、私が都合しても可いわ。』

『それでは恐縮です。』

『幾らくらゐなの。』

『僅かなんです。二十圓もあれば助かるんですが、しかし、もう断つて了ひましたから……多分自分の身體を賣るか、奈何かするでございませう。田舎に酌婦の口があると言つてゐましたから。』

『身を賣る？』 お須磨は吾にもなく驚きの眼を睜つた。

五十六

『まあ、僅かそれつばかしのお鳥目で、身を賣るの？』

『……』 小山はたゞ俯向いて、黙つてゐた。

『お前、ほんとにあの女と何の關係もないの。好い仲ぢやないの？ え、眞實のこと

をお言ひ。ね、小山、今まで言つたのは嘘でせう。ね、然うでせう。何かあるんでせ

う。あの女と出来てるんでせう。』 お須磨は執拗く小山の横顔を覗込むやうにして、

『私もね、そんなお前の秘密を知つたからには、決して悪いやうには取計はないわよ

だからね、私にだけ、眞實のことをお言ひ。ね、小山……』

『……』 小山はまた顔を赫くして、差俯向いてゐたが、お須磨の親切さうな辭に魅せられたやうになつて、彼は思切つて口を利いた。『恐れ入ります。……奥様さまのお察しの通りです。』 然う言つて、外方を向いた。

『でせう！』 お須磨は吾意を得たと言つた風に、大きく頷いて『その女に、そんな酌婦

なんかさして、お前さんは可いと思ふの。』

『……………』

『それぢや、あんまり可愛さうぢやないの。』然う言つて、お須磨は四下を注意深く見廻しながら、不圖氣が付いたやうに、『こんなところで、立話も出来ないからね。庭の四阿へ行つてね、待つこいで……私もまだいろく聞きたいことがあるからね。悪くは計はないから……』

お須磨は低聲で囁くやうに言ふと、ついで小山の傍を離れて奥へ入つて行つた。小山は何だか狐にでも憑まれたやうな氣になつて、ふらりと玄關を下りると、また元來た路を通つて庭へ入つた。そして築山の裾を廻つて、四下を見廻しながら四阿の方へと降りて行つた。

梅林と云ふ程ではないが、幾株かの梅の老木が、青い苔をつけて其の傾斜面にひねくれた幹や枝を蔓らせてゐた。自然木で作つた其の四阿の周圍には、美容や萩などが植えてあつた。

小山は思ひがけなくお須磨に發見された自分の秘密から、ふと彼女の同情を買つて、女に遣る金までも恵んで呉れると云つたお須磨の辭を信じて、此處で彼女を待つべく來は來たものゝ、何だか薄氣味が悪いやうな氣がして、心が落着かなかつた。

『あの女のことだから、あんなことを言つて、一杯食はず氣かも知れない。』

彼は四阿の傍まで來た時、ふとそんな氣がして、お須磨の心の底が推測られないやうな不安を感じた。しかしまた、叔母のお篠などの話によると、油斷のならない女のやうに言はれてゐるお須磨が、反つて氣心の優しい、物解りの好い親切者であるやうにも思はれて來た。

『左に右、待つて見よう。』

小山はさう考へて、四阿の中へ入ると、そこに腰をかけて、袂から菴蓑を出して、マチを摺つた。青い煙が静かな夏の夕らしくふわ／＼と上つた。四下は閑然してゐた。すると、ものゝ二十分と経たないうちに、お須磨の派手な浴衣がけのすがたが、遙か彼方の築山蔭に認められた。さうして、庭木の繁みの間の徑をそつちへ廻つたり、

こつちへ折れたりしながら、段々どもの寂しい梅の木の方へと近付いて来た。

小山は何となく胸がどきついて来た。何だか戀人でも待つてるやうな、道ならぬ仲の人にでも逢ふやうな、不安と歡喜を感じながら、吾にもなくそわ／＼して尻が落著かなかつた。それに濃藍染めの浴衣に細い帯をしめて、私と自分の方へ歩いて来る彼女の仇めいた丸鬚姿が、妙に彼の若い心を唆つたばかりでなく、自分と自分の女に同情して金まで呉れる彼女の心が、此場合に取つて、どんなに嬉しかつたか知れなかつた。

『ごうも、お待遠さま。』お須磨は息を喘ませながら、そのペンチに腰を卸した。

五十七

『ぢやあね、私お金を持つて来ましたからね。』と、お須磨は些つと帯のところへ手をかけて、『だげどもね、これは秘密ですから、其のつもりでね。可ござんすか。』

『然うでございますか。』と、小山は躊躇と満足との不思議な表情を顔に浮かべて、

『しかし、私は理由なしに、あなたからそんな金を戴いては濟みませんですから。』と、一應は辭退して見た。

『可いぢやないの、私が上げるんだから大丈夫ですよ。今でこそ、私も不自由はしないけどもね、これでも苦勞はしてゐるんだから、そんなお話を聞くと氣毒でならないのだから。』

小山は彼女の辭から出る、一種の魅力を感じない譯にはいかなかつた。疑ふ餘地も、反抗する氣持もないやうに感じた。

『お前さんのことだつて、私はね、これで心配してゐるんですよ。それとお前さんはお篠の身内なんだから、私のことなんか、多分快くは思つてゐないんだらうけれど、ごうせ人の世話になるならね、眞實に利を思つてくれる人が好いんですよ。それや絢子さんも好い人でせうけれどね、お實家は貧乏だし、此頃は家の旦那に好く思はれてゐないから、あの人達の身上だつて何時奈何なるか知れやしない。そんな人に付いてゐたつて、末の見込のある氣遣ひはないんですからね。當節はお金がなくちや、何に

も出来やしませんよ。』

『は。』 小山は喘ぐやうに言つた。

『お前さんさへ其の氣ならね、大旦那に私から話をしてね、お前さんのことは何うにかするつもりだけれど、それもね、私を信じてくれなくちやあ。』

小山は、何だか此女に巧く丸め込まれるやうな氣がしてならなかつたが、しかし意思の弱い彼にとつては、彼女の甘い舌はまるで密のやうな甘さと、快よさを與へるのであつた。

『は、信じます。』 小山は遂に然う言はずにはゐられなかつた。さうして、それと共に此女の言ふことなら、何でも聞かうといふやうな不思議な誘惑を感じた。

『眞實に？』 お須磨は色つぽい目で、若々しい血潮の漲つた彼の顔を、意味ありげに眺めながら、『ぢや私、一つお前さんに聞きたいことがあるのよ。』

『は、何ですか。』

『お前さんはね、私と絢子さんど、ごつちが氣毒だと思つて？』

『それあ、あなたよりか、若奥様の方が……。』

はつと思つたが、つい然う言つて了つたので、小山はもう取返しが付かなかつた。拙いことを言つたと、氣が付いた時には、もう遅かつた。

『奈何して？』 お須磨は厭な氣がしたが、笑ひに紛らして、『ぢや、お前さんの女とは……？』

『あれは、論外です。』

『私だつて、やつぱり同じぢやないの。』と、お須磨は優しい眉をびくつかせて、『私なんかね、親が零落れために、あんな老人のところへ片著いて、随分つまらないと然う思ふわ。そして、あのお爺さんが死ねばね、私はあの若夫婦に窘め出されるか何だか、知れやしない身の上だわ。』

『まさか、そんなことはないでせう。』

『いゝえ。だからね、私、うつかりしちやゐられないの。』と、お須磨は明け透けに言つて、『せめて、お前さん一人でもね、私に同情してくれ、ばね、ごんなに嬉しいか知

れやしない。私の味方にね。』

『私がですか。は、なります。』

『眞實に？』 お須磨はちろりと秋波を送つて、『それが眞實なら、私お前さんのためにね、屹度悪いやうにはしないつもりよ。……差當り私、お前さんに訊きたいのは、今日ね、絢子さんは何處へ行つて？』

お須磨の眼は一層輝いて来て、小山を惱殺するやうに熟と見詰めた。

『さあ。』 これには小山も有繫に返辭を躊躇しない譯にはいかなかつた。

『そら御覽なさい。お前さんはやつぱり、絢子さんの味方なんだわ。』

『そんな譯ぢやないんです。』 小山は譯もなく頭を掻きく、恐れ入るやうな態度をした。

『ぢや言つたら奈何？ 私ね、ちやんと知つてんのよ。絢子さんがそつと出て、俥にも乗らないで行つたのは。何處へ行つたか當て、見ようか？』

『……………』

『よう、そんなに私を焦らすもんぢやなくてよ。』 お須磨は一膝乗出して、『それとも、

お前さんは何かね、先刻私に言つたのは嘘なの？ 私の味方になるなんて、あんなに

はつきり言つたのは、私を一時嬉しがらせるつもりだつたのね。……いゝえ、然うだ

わよ。私をかつぐ腹だつたのよ、屹ど。』

『奥さん、そ、そんなこと……そんなこと仰言つては、私困ります。』 小山は周章で

て打消すやうに、『そんな譯ぢや、決してないのです。實はその……若奥様の行先は……』

『。』

『口止されてるんでせう。そんなことぢやんと、私知つてるわ。』

『は、いえ、その、實は、あの白井といふ人のところへ、些つと行かれたのですが……』

『。』 小山は到頭それを口へ出して了つた。と、脇の下からたら／＼と冷汗が流れる

のを彼は感じた。若奥様に、ほんとに濟まないと後悔されたが、しかし、今となつて

は奈何とも爲方がなかつた。小山は直ぐまた、前言に押蔽せるやうにかう言つた。

『それも、今度の事件について、何か依頼されるらしいのですから、實は若奥様の一

存で……。』

『然う。』と、お須磨は頷いて、『もつと、詳しいことを知つてゐるでせう？』

『いえ、それ以上は何にも知りません。』

『白井といふ人と、絢子さんとの間はどんなの。以前から何か關係があつたの。』お須磨はわざと素知らぬ振りで、軽く訊いた。

『古いことは、私も知りませんので……。』

『戀仲ではなかつたの。』

『さあ。』と、小山は首を傾けて、『そんなことがあつたかも知れませんが、多分叔母が知つてゐるだらうと思ひます。』小山はそれまでは言ひたくないし、またよくも知らないので、巧に鋒先を避けて、叔母の方へ向けた。

『ぢやね。』と、お須磨は低聲になつて、『これからね、絢子さんと其の白井との間に何かあつたら、私と私に知らしてくれない？ 其代り私もお金で出来ることならね、どんなにでもお前さんの爲になるから……。』

『はあ。』

『どうせ何だわ、湯治場で構曳をしてゐたくらゐの、あの人だちの間なんだもの。絢子さんが何をしてゐるくらゐは、私にはちやんと判つてゐるんですよ。お前さんたちはね、品行方正な若奥さまだと信じてゐるか知らないけどもね、私の睨んだ眼は外れませんよ。』

『は。』と、言つたが、小山はお須磨の言方が餘りに野卑だと思つたので、『それは、しかし、奥さまの誤解ぢやありませんか。』

『なに、そんなことがあるもんですか。人はね、見かけによらぬもんですよ。』お須磨は例の魅力的な表情で、押へ付けるやうに言つた。『まだ、私は、お前さんに話したいことがあるけどもね、お前さんもよく考へてね、今のうち自分の氣を決めて了つた方が可いのよ。』と、彼女は帯の間から、手の切れるやうな紙幣を三枚出して、『ぢや此處に三十圓あつてよ。』

『いや、しかし……。』と、小山が躊躇するのを、お須磨は不意に起上つて、彼の傍に

するりと寄りながら、『お前さんもよつぼど気が小さいのね。』
無理に彼の手に握らせたお須磨は、矢庭に自分の興奮した頬を男の頬にひたと摺寄せて、男の唇を吸つた。はつと思つて、小山が起上らうとする刹那、遠くに自分の名を呼ぶ聲が聞えた。二人は弾機に弾ねられたやうに、驚いて右と左へ離れた。頭の上で鯛がカラ／＼と嘲けるやうに鳴いた。

無理解

五十八

其日、絢子が白井の家から歸つたのは、夜の八時頃であつた。が、其日だけでは用事は片著かなかつた。それは事件の内容を打明けて、一度辯護士の意見を聞いて見なければならなかつたので、白井は電話で、築地にゐる其の辯護士の事務所へ、會見に都合の好い時間を問合せてくれたりした。

『明日午前中なら、いつでも逢ふさうですが、あなたの御都合は奈何ですか。』白井は電話室から洋風の書齋へ歸つて來ると、絢子に然う訊ねた。二人はもう一時間に亙つて、今日の結果と其の善後策について、協議を凝らしてゐたのであつた。

『私は、いつでも好うございます。』絢子は其時白井を見迎へながら應へた。

『では然ういふことに。』と、白井は和やかな顔をして椅子に著くと、それで先づ話が一段落著いたと云ふ風で、靜かに金口を一本取つてマチを摺りながら、『しかし、文平といふ人は、想像以上に没分曉漢ですな。あなたは今日までよく、そんな舅の氣嫌を取つて來られたですね。』

『え、でもね。』と、絢子は嫣然して、『不斷はそんなでもございませぬの。今度の結婚で調子が幾らか、變つたやうでございませぬ。』

『尙ほそんなこともあらうかと思つたものですから、金の方もね、私が少し心當りを聞いておきました。』白井はまた其の問題の未來に移つて、『事によつたら、此際綺麗に談判をつけて、島家に係る債務を片著けて了つた方が可いですな。』

『はあ、然う出来れば、それに越したことはございませぬけど、何分にもねあなた、大金でございますから。』

『だから、それを負けさすのです。そこは辯護士の腕一つですよ。尤も他で借換をしても、金は拵へなければなりませんまいからね。その方は、私が奈何にか心配して見ませう。』

『それでは、餘りお氣毒でございますわ。』

『いや、これは山村先生の恩誼に對して、私が聊かお酬ををするまで……。』

絢子は何と言つて、感謝の意を表して可いか解らなかつた。そして、黙つて俯向いてゐるうちに、自然に涙が入染んで來た。

と、白井はそれを見て見ぬ振をして、『奈何です、別に御馳走もありませんまいが、お差支がなかつたら、晩飯でも召食つては……もう御覽の通り、家庭の主腦が仆れて了つたので、折角お出で下すつても宿屋同様で……。』

『いゝえ。』と、絢子はごこ寂しげな四下を眺めながら、『私、さうもしてをられませ

んのです。お子さん方がお歸りになります時分に、またあの更めて悠然遊びに參りますから。』

然う言つて、絢子は間もなく白井と別れたが、何だか餘りに多くの荷を白井に背負はせて了つたのが心苦しくて、途々俥に揺られながら、いろ／＼に思ひ惱んだ。寧ろ白井に相談しなかつた方が、可かつたやうな悔もあつたり、自分が至らないために、問題を大きくして了つたやうな不安も起つて、今更自分の立場の苦しいことを、熟々感じたのであつた。

其晩は、辰衛が何か調べものがあつたので、絢子は今日の事件を彼に話す暇もなく夜が更けて了つた。

翌日はまた八時頃から辰衛が出勤して了つたので、おち／＼話もしてゐられなかつた。するうち、九時頃に白井から電話がかゝつて、直ぐ來て呉れと言ふことだつたので、急いで彼女は家を出たのであつた。

白井の家の玄關先には、もう自動車が來て客を待つてゐた。そして昨日の書齋で十

分ばかり話をすると、急いで二人は家を出た。

白いリネンの洋服を著た白井と並んで、絢子は自動車の中に座を占めてゐたが、朝の間の町はまだ埃もそんなに立たず、しつとりしてゐた。自動車は微な揺れを二人の體へ傳へながら、滑るやうに街上を走つた。

『なに御心配は入りませんよ。辯護士が巧くしてくれます。』など、白井は安心させるやうに絢子に言つた。

五十九

白井が頼んだ辯護士といふのは、二木と云つて、民事では有名な博士である。會つて話してみると、そんなに法律くさいところがなくて、調子も極めて平易であつた。彼は白井と絢子とが、交々話す事件の起因と内容を聴取ると、肩を搔つてくすくす笑ひ出した。

『ふゝむ、妙な老爺さんだね。それあ一つ、其の小倉といふ番頭さんと呼出して、篤

と訊いてやらう。』

『そして君の見込は奈何だね？』白井は二木に訊ねた。

博士は些つと首を傾げて、『さうさね、見込と云つたところで、一度其の男に會つて見んことには判らんけれど、親戚關係でもあり、貸借當時の事情が事情なのだから、其の連帯の分だけを何とか片を付けたら、それで温なしく引退りさうなものぢやないか。』と、事もなげに言つた。

『そんなことで済めば、大變に結構だが……。』

『それにしても、其の連帯の方だけでも、一萬といふんだからね。それは出来ますか。』と、博士は絢子の方を向いた。

すると、白井が引取つて、『それは大丈夫なんだ。事によれば、もつと出来るかも知れん。』

『いや、それ以上の必要はあるまい。尤も承諾しなければ爲方がないがね。先方にしても、訴訟を起してみたところで、裁判官から示談を勧められて、引退るくらゐが落

ちだからね。さうしておいた方が得策なんだ。左に右一兩日中に、其の男を呼んで訊いて見よう。若し其の男が山村さんの所へ行つたらね、私に委してあると云ふことを、お断りになりさへすれば、それから委任状を一つ。』と、博士は書生を呼んで、其の書式を持つて來させたりした。

そして、そんな話が全く局を結んで、餘談に移つた時分に、丁度晝飯時分になつたので、博士は書生を呼んで、行きつけの銀座の方の洋食屋へ、支度を命ずるやうに吩咐けた。

『奈何です、甚だ失禮ですけれど、お差支がなかつたら、お附合ひ下さい。』と、二木は絢子に言つた。

『は、有難う存じます。折角でございませけれど、これで私も一安心でございませう、これから直ぐ澁谷の家へ參つて、此のことを父に報せたうございませう。』
『しかし、まあ可いでせう。』と、白井も絢子に、『折角二木君があア云ふのですから、一時間ばかりなら可いでせう。』

『はあ、然うでございませぬえ。』

そこで、三人は間もなく打連れて自動車に乗つた。そして銀座の其のレストランでは、二階の奥まつた静かな部屋で、雑談に耽りながら食事を取つた。

絢子がそこから二人に別れて出たのは、午後一時頃であつた。彼女は直ぐ澁谷へ行つて、それから番町の家へ歸つて來たが、其時はもう五時頃になつてゐた。

すると、其日は辰衛がいつになく早く歸つてゐた。小山に訊くと、彼は今まで其所で貞子に擲揄つてゐたが、多分お母家の方であらうとのことであつた。

『何か、聞いてゐらして?』

と、言ふと小山は深い目色をして、『いゝえ。何にも伺ひませんでした。』然う應へたきり、彼は黙つて引込んで行つた。しかし、其の調子は何となく周章へ氣味であつた。感情の敏い絢子は直ぐそれを見て取つたが、しかし、それは書生が主人に心配をさせまいとして、隠して呉れたんだらうと善意に解して、たゞ『然うを。』と言つて、自分もそれなり黙つて、洋館の方へ引込んだ。しかし、絢子にとつてはこの事件が起

つてからは、何時でもさうであつたが、今日は殊に此の自分の家が、妙に寂しく冷たいやうな気がしてならなかつた。

絢子の口からは、自然に深い溜息が洩れた。ど、そこへ顔を出したお篠の表情までが、何となく暗く見えた。絢子は何だか、人の家へ無断で入つて来たやうな感じがした。

六十

晩飯の時刻になつても、辰衛は此方へは遣つて来なかつた。女中に聞かせるど、久しぶりで父親と一緒に食へることにしたと云ふ返辭であつた。

「はてな。」と、折も折とて、絢子は何だか厭な氣持がした。

「奈何したと云ふんでせう。お舅さまのお陪食をするなんて、つい、近頃ないことだわ。」絢子は、貞子やお篠と一緒に晩飯の食卓に著きながら笑つてゐたが、そんなことは歸朝以來一度か二度あつたきりで、それも絢子と一緒にあつたのに、今日に限つて自分一人お母家で食事をするなどは、何かそこに意味がなくてはならないと思は

れた。

「眞實に變だこと。」絢子はお篠に話しかけた。「ねえ乳母や、私の留守の間に何かあつたんぢやなくて？」

「さあ。」と、お篠は首を傾げて、「私には氣も付きませんが、多分奥さまのお歸りがお遅いからのことで、別段深いお考へがあつて、なすつてゐらつしやる譯ではないのでございませう。たゞ大奥様がお招きになつたものですから、餘儀なくいらしたのでございませう。」

「それなら可いけれね、私はまた歸つて来ると、何だか家の様子が、がらりと變つたやうでね。」

「まあ、それは奥様、お氣のせゐでございませうよ。御自分の御心配がおあんなさるものですから、お家の御氣分までが、變つて見えるのでございませう。旦那さまは左に右として、謂はゞ皆さまは、奥様の敵のやなものでございませうからねえ。」

「それもさうね。」絢子は潤んだ目を俯せて、「反つて他人の方が私のために同情して

骨を折つて下さるくらゐなんですもの。私つくづく情けないと思つたわ。』

『ではあの、何とか片が付さうなのでございますか。』

『まだ、そこまでは運ばないけれどもね。白井さんが大變に心配して下さつてね。有名な辯護士を頼んで下さつたから、乳母も安心しておくれ。』

『まあ、さよでございますましたか。』

『私、あの方にね、そんなにまでして戴いて、ほんとにお氣毒でならないんだけど、今の場合背に腹は替へられないと思つてね、黙つてお指圖ごほりになつてゐたのよ。でもね、辰衛と云ふ立派な良人もあるのに、間へ入つて何とか調停しさうなものだと、傍から見れば不思議に思へるでせうと、私ね、極りが悪いくらゐだつたわ。』

二人はそんな話をしながら、暫らく食堂に坐つてゐたが、するうち絢子は自分の部屋に日本室へ入つて、良人を待つてゐると、一時間半も経つてから辰衛は赭い顔をしてお母家から歸つて來たが、絢子の顔を見ると有繫に極り悪さうに躊躇した。『ほう、いつ歸つた？』

『もう先刻歸つて參りましたの。何ですか、御用がおありのやうでしたから、わざと控へて居りましたの。』

辰衛はそれには返辭もせず、

『今日は何處へ行つてゐた？』

絢子は、その訊き方が、何時もと調子が變つてゐるやうな氣がして、些つと怯氣が付いたやうに、急に返辭が出なかつた。

『今日は何の用事で、何處へ行つてゐたかと、僕は訊くんだよ。』辰衛は酒で赫々とした顔に、愚味らしい怒りの表情をさへ帯びて來た。

『まあ！』と、絢子は呆れたやうに其の顔を眺めて、『あなた怒つてゐらつしやるの。』

『別に怒つてもゐないよ。』

『それなら可うございませうけれど、いきなりそんな可怕い顔をして、私吃驚して了ひましたわ。』と、絢子は涼しい目を睨つた。

『そんなことは、奈何でも可い。お前は今日誰と何處へ行つたかと云ふことを、僕は

訊いてゐるんだ。』辰衛は樗食らしい聲を尖らせた。

『それは解つてゐますわ。ですけれど、今まであなたは、私にそんな口の利き方をなすつたことは、一度もなかつたのですもの。』と、絢子は自分出来るだけ落着いた静かな口の利きやうをして、『もつと静かになすつても、お話の出来ることですよ。』

『それあ解つてゐる。けど、お前の評判は好くないよ。』

『評判？ 評判ですつて？』絢子は反問して、『まあ、厭なお言葉ですわねえ。奈何してです？』

『奈何してつて、お前に判つてゐるだらう。』

『私、別にそんな覚えはございせんわ。でも、不束な私のことですから……。』と、絢子は吾にもなく目を俯せた。

『今日お前は自動車で、何處へ行つた？』辰衛は今まで見たこともないやうな、不快な表情をして訊いた。

絢子は、いつの間にこんなことが、良人の耳へ入つたかを訝かしく思つた。そして、

何だか薄氣味の悪いやうな氣もしたが、これではならぬと、自信と勇氣を出しながら、

『そのことですか、そのことなら私、あなたにこれからお話ししようと、然う思つてゐたんですわ。それはあの、何時かお話ししました白井さんと同乗して、築地の二木辯護士を訊ねましたの。』

『二木辯護士へ……うむ、さうだ、其のことはもう皆なが知つてゐる。』

『では何ですか、二木博士から、あの通知でもあつたのでせう。』

『それもある。しかし、博士からは單に、お前のお父さんから依頼されたと云ふだけのことで、途中でお前を見かけたものが他にある。』

『然うですか。でも、それが悪いことなのでせうか。』

『お前は奈何思ふ？』

『悪いことだと知れば、私だつて爲る氣遣ひはありませんけれど、正當なことだと信じてゐますから。』

『お前が、その辯護士を頼みに行つたといふことも、正當なのだね。』

『正當ぢやないと、仰言るんですの。』と、絢子はもの靜かに幾らか皮肉なやうな表情をして、さう反問した。『私は實家の問題ですから、自分では多少判断を誤つた點がないとも限りませんから。』

『では、お前は鳥家の感情を害しても、實家の利益を計りさへすれば可いと思つてゐるんだね。』

絢子は憫れたやうな顔をして辰衛を眺めたが、何だか自然に氣が苛々して來た。

『いゝえ、さういふ譯ぢやございませぬわ。ですけれど、事理を辨へた辯護士なら、双方の利益になるやうに、圓滿な話をする筈だらうと、私さう信じましたから。』

辰衛は口元に嘲笑つた。『誰が一瞥、そんな指圖をお前にしたんだ。まさかお前の智慧ぢやあるまいね。』

『誰の智慧にしましても、私はそれより外に執る道がなかつたのですから。』

『それが生意氣といふのだ。お前がそんな生意氣な女だとは、俺も今まで知らなかつた。』

『私が、出過ぎたと仰言るんでございますか。』

『皆なさう言つてゐる。父も、お須磨も、小倉も。』

『それあ私だつて、傍觀してをれば可かつたでせうけれど、事情がそれを許しませんでしたもの。已むを得ず。』

『それなら何故、俺に一應其の事を話さんのだ。』

『それは、あなたの立場が苦しくなるばかりだと存じましたから……。』

『俺の立場は、今となつては益す苦しい。』

『でも、あなたに責任がある譯ぢやないんですもの。私の一人でしたことなんですからね。』

絢子の頬には、前よりも鮮かな皮肉の笑ひが漂ふた。しかし、此場の光景は段々險惡になつて來た。

『では、お前が其の問題を、人もあらうに白井のところへ持込んだと云ふのは、一體奈何いふ理由だ。』辰衛は暫らくしてから言つた。

『それはあなた……あの方が、澁谷の家の利を、誰よりも思つてくれたからですわ。』と、絢子は熱情的な目色をして、きつぱりと言つた。『其のことは、私あなたにもお話して、一緒に喜んで頂かうと、さう思つてゐたくらゐなんですから。この問題について、あの方がどんなに心配して下すつたか……それは是非、あなたにも聞いて頂かうと思つてゐたことなんです。』

辰衛は、不愉快さうな目を睜つて、『俺がそんなことを聞いて、何になる？』

『でも、私の喜悅には、あなたも同感して下さる筈だと存じましたから。』絢子はやゝ嚴肅な態度で、『それに此の問題については、あなたもつて心配して下すつたのですからね。圓滿な解決が付くと云ふことは、あなたに取つても、決して不愉快なことぢ

やないんですもの。私あなたが、そんなに怒つてゐらつしやる理由が解りませんの。あなたが御自身に骨をお折りになることは、お舅さまの前へ對して、工合の悪い點があるにしても、私が奔走することくらゐは、同情して頂いても可い筈ぢやございませんか。』

『……』辰衛は黙つてゐた。

『私は今まであなたを信じてゐました。尊敬もしてをりました。ですけれど、今のあなたのお辭で、私は何だか情なくなつて了ひました。あなたは、そんな冷淡な方なんでせうか。』然う言つて、絢子はほろ／＼と零れる涙を手帕で壓へた。

『俺が冷淡だ？』

『……』

『俺が何にもしないから、それで白井に頼んだと云ふんだね。』

『そんな譯ぢやございませぬ。誤解なすつては困りますの。私はあなたに何にも求めてはをりませぬ。たゞ同情を求めてゐるだけなのです。』

『しかしだね、お前の實家につて人はあるだらう。他家へ、しかも問題の相手たる島の嫁として、お前が飛出して、しかも白晝白井と自動車で乗廻すなどは、餘り穩かな話でもなからうと、俺は思ふんだ。俺ばかりぢやない、父もお須磨も、皆なさう言つて、お前を非難してゐる。』

『そのことは、私も氣付かないでもございませんでしたけれど、でも白井さんが一緒に行つた方が可いと仰言るものですからね。私もさうくは人委せにばかりもしておけないと思ひまして、お伴したんですけれど、それが、そんなに悪ければ、私お詫をしますわ。』

『俺に謝罪つたつて、爲方がない。父が立腹してゐるんだから。』

『お舅さまにも、私からお詫をしますわ。どうせそれは、皆さんの感情を害しないでは、濟まないことなんですもの。それは私が覺悟をしてゐました。』

『ぢや、何だね、此事については實家さへ救へば、お前の一身はどんなになつても介意はないといふ、意氣込なんだね。』

『そこまでは、私も考へませんでした。』 絢子は溜息を吐いて、『若しそんなことにもなれば、それは爲方がないと諦めるより外ございませんわ。』

『好い決心だ。』と、辰衛は若笑を浮べながら、『お前が夫婦の愛情までも睹して、それで遣つたとすれば、俺は何にも言ふことはない。』

『でも、私の立場として、爲方がないんでございませぬもの。そのために、私が離縁にでもなれば、私は陥穽にかゝつたと思ふより外ございませぬわ。』

『何だぞ。』

『いゝえ、それはあなたの御存じないことなんですの。』 絢子は涙の隙から淋しい微笑を浮べた。

絢子は良人に向つて、言ふ日になれば、言ひたいことは澤山あつたが、突張の利かない彼としては、此場合自分から進んで、妻の問題に觸れて行くだけの自信も勇氣もないことを絢子は知つてゐたので、此上彼の女々しさを咎めるのは愚だと諦めた。

たゞ不思議なのは、自分が白井と自動車に同乗してゐたことを、辰衛が奈何して知

つたであらうか、何處からか判るにしても、知れ方が餘りに早いと思つた。また假へ二木辯護士が、電話か何かで、早速小倉へ掛合つたにしても、自分が白井と一緒に訪問したことに對しては、些つと口止めもしておいたので、彼の口からそれが洩れたものとは思へなかつた。すると、或ひは辰衛自身か誰か、途中で自分たちを見かけたのではなからうか。「途中で見かけたものが、他にある。」然う言つた辰衛の言葉が思出された。と、先刻歸つて來た時の書生の素振が、妙にある意味をもつて絢子の頭腦に蘇へつた。

「でも、小山がそんなことを？」と、絢子は直ぐ心の中で打消した。彼はお篠の甥である。それが自分の不利になるやうなことを言ふ筈はない、と彼女は思つた。

左に右、良人の感情には嫉妬と猜疑といふものゝ加はつてゐるのが厄介である、と、絢子はそれを焦たく思つた。

で、絢子はこれ以上深入することを避けて、やがて自分の部屋へ退つたのであつたが、するうち何時も辰衛が寢室へ入る時刻の十時過……十一時になつて了つた。それ

でも辰衛は寢室へ來ないので、絢子は幾らか氣にかゝつて二度目に二階へ上つて見ると、辰衛は風通しのいい窓際に脇掛椅子を持出して、書生の小山と何時になく親しげに話をしてゐた。

『おや、お前そこにゐたの。』絢子は何のことも氣付かないで、ひよいと其所へ顔を出して、『あなた、まだお寢みになりませんか。』

『俺か。』と、辰衛はあれからまたベルモットでも飲んだと見えて、先刻よりも一層突拍子な聲で、『俺は寢ない。眠かつたら先へお寢み。』

『いゝえ、私は眠い譯ぢやございませぬけれど、もう遅うございませぬから。』
『遅くたつて可いちやないか。お前は勝手にお寢み。』

『は。』と、絢子は出来るだけ彼自身の反省を求めやうに、『先刻私の申したことが、お氣に障りましたのなら、どうぞ御勘辨下さいまし。私このことで、あなたのお氣を悪くしては、心持が悪うございますから。』

『いゝよ、もう……お前には立派な後楯があるんだからな。そんな他人の力を借

りてまで、我々を叫まさうとするなら、俺だつて、決してお前に同情をもつ必要を認めんよ。』

『まあ!』と、絢子は困惑の色を浮べて、良人の顔を見たが、形勢が先刻よりも亦た一層險悪だと思つたので、何とも言へない厭な氣持であつた。彼女は今まで自分の良人を、こんなに利己的な男だとは思はなかつた。今夜は顔を見るのも不快なやうな氣がした。暫らく黙つて俯向いてゐたが、『ではお先へ』と、會釋して彼女は悄悄と下階へ下りて行つた。

それから大分経つてから、辰衛が寢室へ入つて行つた様子なので、彼が臥床に就いたと思はれる時分を見計つて、絢子は靜かに室のドアを開けて入つて行つた。そして私と窓帷を引いて、寢衣に著換へなごして寢床に上つた。辰衛はもう眠つてゐるらしかつた。

絢子は此の寢室を今夜ほど厭はしく思つたことは、曾てなかつた。あんなにまで言はれても良人として侍かなければならぬかと思ふと、彼女は情なかつた。こんなに侮

辱されてまで、此家に留まるくらゐなら、矢張父が言つた通りに暇を取つて、それから問題の解決に取りかゝつた方が、ざれくらゐ屑かつたか知れないと思はれた。

枕に就いてからも、絢子は長く眠れなかつた。明日は夜の明けるのを待つて、自分の態度を決しようなご、考へた。生涯の愛情を獻げるには餘りにも不聰明な良人と、もう此上一日も同棲することは出来ないやうに思へた。

蒸暑い夜が段々更けて、一時頃の夜氣の冷やかさが、窓帷を透してベッドに這寄つて来る頃、絢子は漸とすやくと眠りに陥ちたのであつた。

四下はたゞもうしいんとしてゐた。

陰

謀

六十二

二三日経つと、二木辯護士が自身島家へ遣つて来て、文平に面會を求めた。二木は

其前に小倉との間に、大體妥協が成立してゐた話なので、文平と二時間も膝を交へて話をすると、譯なく解決は付いて了つた。

『實は、貴方のやうな名高い方に口を利いて貰うやうな事件ではないので……』と、文平は、有繋に態々出向いて來た二木に、極りが悪かつたと見えて、お世辭とも皮肉さとも付かぬやうな挨拶をした。そして、絢子を弾付けたと同じやうな態度を取らうとしたが、條理の立つた辯護士の勸解に對しては、さう理不盡なことも言つてゐられなかつた。

二木は、此際一萬圓の連帶責任を脱れると同時に、文平自身の債權に對しては、これを普通の貸借と見做すよりも山村の恩誼に酬ゆる好意的の補助として、此際綺麗に鬻斗を付けて遣つて了つた方が、兩家のための利益ではないかといふことを説き勧めた。文平はそれには大不満であつたが、二木に反抗して表沙汰にすることは、餘り有利でもなかつたので、不承々に承諾させられて了つた。

『俺もこれが貴方の手にかゝらうとまでは思はなかつたので、ほんの内輪で済ます筈

であつたのを、嫁がひどく立騒いだもんですから、つい火の手が上つて了つたやうな譯ですよ。何、山村さんが自身に來られて、云々の都合で今は出來ないから、その中何とか爲ようとお話があればね、俺もやきもきせんでも可かつたが、何しろ連帯の方の債權者が俺の方へ甚く喧しく言つて來るものだから、此際何とか一つ處分をして貰はうと思ひましてな。』文平は辯解らしい口調で、然う言つたのであつた。

二木は用談が済むと直に歸つて行つたが、それと同時に小倉と二木辯護士との間に悉皆仕事か片付いて了つた。

『結局、金のあるものが、損をするやうなことになるのう。』

辯護士が歸つた後で、文平は然う言つて、お須磨と笑つてゐたが、それにしても其の一萬圓の責任を負つたものは、餘程の慈善家か、好事家だと、彼には思れた。

『一體、誰がそんな金を出したか、また何を當にそれを借出したものか……』

『それあ、あなた知れてるぢやありませんか、絢子さんの腕で例の白井といふ人に引出させたんですわ。随分凄ぢやありませんか。絢子さんが此頃ちよく／＼車で押廻

してゐたのは、其の運動の爲めですよ。」

『それぢや絢子が、内々で運動してゐるといふのは、やつぱり事實だつたのかい。』

『事實も事實、もう確かな事實ですわ。』

お須磨は此二三日前の晩、辰衛を呼んで来て、此室で一緒に飲食をして、盛んに絢子の噂をした時も、話した通り、小山がお須磨に貰つた金を築地にある女の家へ届けに行く途中、自動車に同乗してゐた白井と絢子とを、ちらと見かけたといふことを、繰返して言ふのであつた。

『そんな凄腕をもつた絢子さんのことですよ。あのお人善の辰衛さんを胡魔化すくらゐは、何でもありやしませんわ。』と、お須磨は文平の顔色を見い／＼、『つまり何ぢやありませんか、今こそあなたが其の黒い目で睨んでゐらつしやるから可いやうなもの、これがあの人達の代になつて御覽なさいまし、なか／＼今度のやうなことで済みませんわ。あのびい／＼のお實家へ、どうしたつて注込むやうなことになつて了ひますわ。そんなことにでもなれば、私なんか眞實に満りませんね。』

『ふゝむ。』と、文平は苦笑した。

『だからね、あなたも確乎して、下さらなくちや、ほんとに困りますわよ。』お須磨は、ぢろりと秋波を送つた。そして、直ぐ『私を可愛いと思つたならねえ。』と、文平の方へすつと寄つて行つた。

六十三

今朝は朝早くから、縁起でもないものに飛込まれたと云つて、文平はぶう／＼云ひながらそこへ寢そべつてゐたが、やがて禿げ上つた頭の心が懈いと言つて、お須磨に揉ませた。

『恚うでございますか。』と、お須磨は嬌やかな指頭で、毛の薄い赭い頭の地を揉みながら、『私あなたに、後生一生の願ひがあるんですけれどね……。』

文平は目を細くしながら、夢現のやうな聲で、『何ぢや、またお前の親達の隠居所を建てゝくれたらう。』

『それも然うですけれど、それよか、もつと樂に出来ることなの。』
『ふゝむ。』と、文平は眠いやうな他愛ない笑聲を洩した。

『あなたは何時か、あの絢子さんは、どうせ離縁にするのだと仰言つたでせう。』お須磨は低聲になつて、『ねえ、あなた、さう仰言つたでせう。』

『然ういふこともあつたの。あれは一體理窟つぼくて、俺は嫌ひぢや。今度の事件で山村を怒らせたなら、多分娘を返せといふことになるだらうと思つてゐたが、然うもならぬところを見ると、やつぱり未練があるのかも知れんよ。』

『でもあなた、白井といふ人を後楯に頼んで、お實家の肩をもつて、一萬何千圓といふ負債を踏んで了うといふ人ですもの、随分可恐しい方だと思ひますわ。それでもあなたは、あの方を自分の嫁だと思つてゐらつしやるんですか。』

『なに、俺も憎い奴だとは思ふが、舅去りにするのも餘り讀めたことでないで、これは辰衛が氣の利いた奴なら、あいつの口から離縁をすべきものだらうと思ふんだ。』
『では、あなたから、辰衛さんに言つたらいいでせう。』

『だがな、あいつでは言ひ得まい。逆も別れられまいて。』

『でもね、白井のことでは、辰衛さんだつてあんまり好い氣持もしてゐないんですわ。現に一昨日の晩だつて、そのことで夫婦喧嘩をしたんださうですよ。そして、其の翌朝、絢子さんは家を出て、夜遅くまで歸つて來なかつたぢやありませんか。あの時だつて何處へ行つて、何をしてゐたか知れたもんぢやありませんか。小山がね、辰衛さんの吩咐で、白井へ電話をかけた時、女中の應對振りがよつぽど變だつたといふんですもの。』

『それならばお前、そのことを一つ辰衛に話して、此際男らしく決斷しろと、言つてやつたら好からう。』

『それは私だつて、言へないこともありませんわ。あなたの御命令だと言つても好ござんすか。』

『俺の意見にしても好し。お前の腹から出たことにしても好し。左にも右にも、俺は此際あの貧乏政治家と縁を切つた方が好さうだ。此儘親戚交際が出来ると思つてゐ

るのが、大體常識外れの考へぢや。此方が黙つてゐても、先から身を退くのが當然ぢや。

『そんなあなた、恥や義理を知つてゐる人なら、今度のことだつて、こんなことになりはしませんわ。やつぱり恥をかいても得を取れといふ肚で、ごこくまでも粘著いて行かうつて氣なんですわ。だから憎いぢやありませんか。』

『うむ、憎い。』

『私が辰衛さんの眞實のお母さんだつたら、あんな嫁ごは一日だつて、一緒にしておきやあしない。』

『ぢや、其のつもりで、一つ手強く話してみい。』

『可ござんすか。』

『あ、可いとも。』

お須磨は心から嬉しさうな笑を洩しながら、『ほんどね……。』と、また例の色つぼい目で熟と文平を見た。

六十四

辰衛は妻の實家の金問題から絢子がそちこちしたのを不快に思つてゐる矢先、お須磨や、書生の小山から色んなことを聞かされたのに、何よりも白井に關することが不快でならず、果は何時か修善寺で起した妻に對する或る疑ひを、また新にしたやうに厭な氣がしてならなかつた。絢子の過去が、どうも氣になつて爲様がなかつた。しかし、それは當の小山は餘り知らぬらしく、お篠にそれとなく訪ねて見ようかと思つたが、まだ其の機會もなくて、今日まで過ぎた。

ところが、さうして段々日が経つてみると、次第に氣も落著いて來て、あアして一時に自分が妻の貞操をまで疑つて、何彼と争つたりしたことが、いかにも不眞面目のやうに思はれて來た。まだ事の眞相を極めないで、單にお須磨や、雇人の口を信じた自分の輕卒さが反省されて、何だか絢子に對して濟まないやうに感じ出した。考へてみると、絢子としては實家の安危に關する大問題なので、何彼と立騒ぐのは無理もな

いと思つた。それに、自分が始めから餘り彼女の相談に乗氣にならなかつた不親切も思はれて、彼は一層妻に對する氣差かしさを覺えたのだつた。白井に頼んだことにしても、彼女の父の病氣見舞に行つた時、偶然に會つたといふことを考へてみても、そこに何等の疚しい點を、彼女の心中に見出すことは出来ないと言へ思つた。

それは辰衛も今となつては、自分の無理解を恥るより外に爲方がなかつたが、しかし唯白井其人に對する絢子の感情が、何となくそちつへ傾かう／＼としてゐるらしいのをどうしても、快よく思ふことは出来なかつた。勿論、それは飽までも妻を信じない自分の不明ではあるけれども、良人として妻の全部を占有したいといふ慾望から押し、何となく物足りない、或缺陥を感せずにはゐられなかつたのである。外のことは何も彼も氷解したものゝ、こればかりは始終彼の頭にこびり付いてゐて彼は苦しかつた。人知れず一人で悶えた。ある壓迫を感じないではゐられなかつた。

絢子は、良人の心が釋けたのを非常に喜んで、これからは又舊通り、温かい感情の良人を見迎へることが出来ると思つたが、どうしたものか、一度厭な影を自分の心に

投げられてからといふものは、どうしても舊のやうな氣分で對ひ合ふことは出来なかつた。あのことで自分の心に罅を入れられたやうな氣がして、何となく辰衛との間には、溝が出来たやうに思はれてならなかつた。

そこへ持つて来て、お須磨が絢子との離縁話まで昇ぎ出したりしたので、折角平和になつた辰衛の心がまた絲のやうに纏れて來た。しかもそれが父文平の方寸から出たことだといふに至つては、彼は一層惱ますにはゐられなかつた。妻に對して、あんな争ひをしたことだけでも濟まなかつたと思つてゐる矢先に、さうした大問題をまで持出すことは、彼としてはどうしても出来なかつた。

『あなたもほんどに奥さん孝行ね、私もそんな良人を持ちたい。』お須磨は嘲るやうに笑つて、『でもね、よくお考へなさいな。お父さんの氣に入らない奥さんを守つてたつて、長續きはしないことよ。あなたは今が大事な身體よ。』と、彼女はいろ／＼口説くやうに言つた後で、そんなことまで口へ出したのであつた。

『御厚意は感謝します。だが、僕には僕の考へもありますから。』辰衛は然う言つて、

餘り彼女には取合はなかつた。

『こんなこと言つたからつて、私を誤解しちや厭よ。私やね、あなたを思ふから言ふんですからねえ。』お須磨は最後に然う言つて、辰衛の部屋を出て行つたのだつた。

『何を言つて來るか譯が解らない。まあ、しかし、成るやうにしかなるまい。總ては運命に委すとしよう。』辰衛は然う獨語に言つて、ふいと庭へ下りて築山のあたりを逍遙した。

『何だか知らんが、親しくなればなるほど、あの女は妙な女だ。』然う思つて、近頃一層自分に接近するお須磨の舉動を考へたりした。

六十五

氣持よく來た夕立が名残りなく晴れて、夏の夜の空には十日あまりの月が、涼しい光を地上に投げてゐた。一日暑さに喘いでゐた庭の草木も、一時に蘇生つたやうに青と鮮かな緑を浮出して葉末に宿つた露が、小さな銀鈴のやうに輝いた。

築山裏の四阿には、書生の小山が先刻から來て、人待ち頭にぼんやりと蓑を喫しながら立つたり、腰かけたりしてゐた。と、附近にちらと人影がさしたかと思ふと、黒つばい浴衣を著た女の姿がひよつこりと其處へ現れた。そして、後を見い／＼喘ぐやうな息使ひをして、つか／＼と男の方へ近付いて來た。

『大分待つたでせう？』然う言ふのは、紛れもないお須磨である。『私ね、早く來ようと思つたんだけど、お爺さんが早く出かけないもんだから……』小山の向側へ來て、ペンチに腰を下した。『い、月ねえ。』

『先日はどうも有難う。』小山は其後お須磨には會つてゐるけれど、二人きりの場合がなかつたので、貰つた金の禮を云ふ機會もなかつたのだつた。今夜は初めてしみじみとそれが言へるやうな氣がした。そして、其時受けた甘い接吻の快さを、まだ忘れ兼ねるやうに、もう胸をわく／＼させてゐるのだつた。

『何ですんねえ、此人は。』お須磨は軽く制するやうに言つて、『お蔭で絢子さんの秘密が悉皆上つたのね。あの時、私がお前さんに、お金を上げなかつたら、自動車を見る

「ことも出来なかつたのね。」

「僕。」と、小山はもう大分お須磨に馴れて、辭まで友達仲間と同じことを言ふやうになつた。「あの晩、若奥さまに訊かれた時に、ほんとにびくツとしました。悪いことをしたと思つたんです。」

「どうして？ いゝぢやないの。だつて、わざと後を尾けた譯ぢやなし、外へ出て見かけたんだもの。見られて悪いやうなことをする人が、落度だわよ。」

「それはいゝんですが、叔母に何彼と近頃責められるんで、弱つてゐるんです。」

「篠やに？ どうして？」

「叔母はね、若奥さまのことを僕が言ひつけたんだらうと言つてゐるんです。それにね、先達奥さまと……。」と、言ひかけて、小山は口ごもりながら、「あの、あすこの四阿でお目にかゝつたのを、叔母は知つてゐるらしいのです。それで、何のために庭で奥さまと會つたのかと、煩く訊くんです。」

「まあ……それで、小山は何と言つて？」

「初めはそんなことはないと言つたんですけれど、肯かないもんですから……。」

「會つたつて言つたの。」

「えゝ、しかし、あの、庭の掃除をしてゐて、ひよつこりお目にかゝつたつて……。」

「私が言つたことは、喋りやしまいね。」

「いゝえ、決して。」と、小山は言葉に力を入れて、「たゞそれだけです。」

「なら可いけど……。」と、お須磨はふと思出したやうに、「それで、お前さんはどうして？ あの女とは切れて？」

「築地のですか？ えゝ、もう一切！」

「ほんと？ 嘘でせう？ 甘いこと言つてるわ。」

「冗、冗談でせう。決してそんな嘘なんか、僕奥さまに對して一度も……。」と、小山は焦込みながら言つた。

「おほゝゝ。お前さん、思つたよりか生ねえ。私そこが、お前さんのそこが好きさ。」

お須磨は、つと立つて、小山の側へ摺寄つた。

『あんな娘の子、どう？　こんなお婆さんよか好いわね。』と、熱つた自分の頬を、興奮し切つてゐる小山の熱い頬にひたと寄せた。

丁度雲が出て、月を掩ふたので庭は暗くなつた。二人は暫らく黙つてゐた。

『私ね、今夜折入つてお前さんにお頼みがあるのよ。聞いてくれて？』お須磨は相手を盪かすやうな色つばい聲で、然う言つた。

『は、奥さまの仰言ることなら何でも……。』小山は手を握られた儘、顔も上げ得ないで口籠るやうに言つた。

『まあ嬉しい！』と、お須磨は少し業山に言つて、四下を見廻したが、ふと氣が付いたやうに、『此方へお出で、並んで坐れるから……。』右側の長いベンチの方へ、握つてゐた男の手を引寄せた。小山は、もう相手の女が爲すまゝであつた。年は僅かお須磨と五つくらゐしか違はなかつたけれど、彼の前にはお須磨はまるで姉以上、母親のやうに大人びて見えるのだつた。まだ多くの女を知らない小山は、たゞもう胸が高鳴るばかりで、何を聞いてゐるのか、何と應へてゐるのか、自分でも判らないやうにば

うつとしてゐた。その代り一生懸命であつた。お須磨によつて、初めて女といふものを知るやうな氣がした。此の場合一緒に死なうと云へば、死に兼ねない彼の熱度であつた。お須磨はまたそれを心私かに喜んだ。奈何にでも利用すれば、幾らでも利用される男だといふ氣が彼女にはあつた。

『あのね、やつぱり絢子さんのことだけどもね。』と、お須磨はひたと小山に寄せつて彼の耳元へ囁くやうに、『これからね、一層絢子さんの行先を氣を付けておくれ。そしてね、白井さんの家へ一度行つて、あすこの書生か女中に會つてね、それとなく訊いてくれない？……何をつて絢子さんと白井のことをよ。どんな關係まで進んでゐるのかね。』

『はあ。』

『さうすると大概解るぢやないの。尤も、女中なんか眞實のことは言はないでせうけれどね。そこを甘く……。』と、お須磨は急に思出したやうに、『さうく、慥うしたらいゝわ。そんなことは男ではなかく、甘く行かないから、そら小山のあの女ね、築

地のお愛さんて言つたわね。あの人に頼んで、訊いて貰へない？」
「然うですねえ。」小山も餘りに突飛な計畫なので、變な氣がして頓に返辭も出かねるのであつた。

『いけない？』

『いえ、そんなことはありませんが……。』

『ちや可いちやないの。その代り運動費、ほ、ほ、お鳥目は幾らでも出すわよ。』

『はあ、しかし、あの女が甘くやれますかしらん。』

『だつて、そんなに六つかしいことぢやないぢやないの。』お須磨は押蔽せるやうに言つて、『それからね、澁谷の絢子さんの實家へね、僞手紙を出すの。それも小山に頼みたいわ。』

それは、絢子が今度實家の負債一件で、良人をそちのけで運動したことが祟つて、今にも離縁になりさうだから、早くお前の方で引取つたら宜からうと云ふのであつた。

『それは眞實なのだからね。でもね、當方から去られたとあつては、絢子さんが可愛

さうだからね。これは私の寸志よ、全く私の思ひやりよ。表に見えない私の親切なんだわ。さう言つてやれば、あの頑固な絢子さんのお父さんは、きつと怒つて直ぐ引取るわよ。』お須磨は巧に言ひ繕つた。

『でも、僕の手ぢや……、山村さんぢや覚えてゐるでせうからね。』

『だつたら、外の人に、誰かお友達に頼んで頂戴。それはね、どこまでも忠告的にね他人から厚意をもつて知らせるやうに書かなければいけないんだから。』

『承知しました。しかし、甘く行きますかしらん。』小山は何だか大きな悪事でも仕出來すやうな不安を覺えた。

『なに、大丈夫よ。』お須磨は譯もなく言つて、『ぢやね、こゝに五十圓あるから、これをお前さんに上げるからね、いゝやうに分けて頂戴な。また入るなら、何時でもね、上げるから……。』と、お須磨は辭限する小山の手へ、それを無理に握らせた。

月が出て、抱擁せんばかりに犇と寄添つてゐる二人の姿を、しろく横から照した。

邪魔もの

六十六

絢子の實家の事件が片付いたので、絢子は白井に對してお禮をしなければならぬと思つた。そして、辰衛と相談の上何か白井の子供へ贈物をしようといふことになつて、ある日、夫婦は日本橋の方のある大きな百貨店へ出かけて行つた。

丁度日曜日だったので、辰衛も絢子と一緒に出かけることにしたのだつた。絢子は白井へのお禮の品物は、矢張り自分一人で撰擇したいやうな氣がしなないでもなかつた。しかし、辰衛が折角然う言つてくれるのを、拒む譯にはいかなかつた。で、二人して行くことにしたが、大體ならば切手か何か可いと思つたけれども、先方に細君がゐるので、面倒のないやうに品物で贈ることにした。

『お前は、どのくらいの價格のものを贈るつもりだ。』辰衛は身仕度をしてゐる絢子に訊ねた。

『さうですね、私から言へば、あの方は大恩人なんですから、少し奮發したいと然う思ひますけれどもね。思ふやうになりませんから……。でも、百圓やそこいらはね。』
『百圓で好いか。』辰衛は案外氣乗りのした調子で、『それちや少からう。』と、首を傾げた。

今度の事件が圓く形づいたことは、自分にまつても仕合せだといふことに、辰衛も氣がつき出してゐた。無論絢子の奔走で然うなつたことについては、多少の紛紜は後へ残るでもあらうけれども、まさか夫婦別れをするやうなことはないと思つてゐたので、此際一應は絢子と共に白井の骨折を感謝すべきだと思つた。

辰衛は、至つて子供っぽい利己的な男であつた。工業上の知識や何かには富んでゐたけれど、科學が頭腦の中に詰つてゐるほどには、人間社會のことは解らないのだつた。謂はゞ目前の利害だけしか解らないと云ふ側の男であつた。其の點では、彼は全く一般の現代の若い紳士の、悪い方の一つの型と云つてもよかつた。

『それは、お金の分量や何かで、白井さんの御恩を測るのは、實は失禮なことなんですわ。ですから、お金の高よりも此方の志しさへ届けばね。』

『無論さうさ。』と、辰衛は負惜みらしく、『けど、お禮をする日になれば、餘り少いことも出来ないだらう。』

『でもあんまり多いと、白井さんが迷惑しますから……そんな形式でなしに、ほんのお子さん方への手土産の格でね、上げた方がよございますわ。』

『それも然うだね。』
朝の十時頃のこと、外はだん／＼暑くならうとしてゐたが、百貨店の大きな建物の中は有繫にそんなでもなかつた。

絢子は辰衛と二人で、人混みの中を避けながら彼方此方と品物を見て歩いた。そして、子供の單衣地や兵兒帶や、シャツやエプロンのやうなものを、十二三點も買ふともうそれが百圓を超過した。

『それ御覽、だから俺が少いと言つたんだ。』辰衛は不平らしく言つた。

『ですから、もう此のくらゐにしておきますわ。』と、負けぬ氣の絢子も苦笑して、『でも、これぢや寂しいから、何か手遊び物を少しばかり付けなくちや。』

二人はまた人の中を縫ふやうにして、一番階上の玩具部へ、エレベーターで上つて行つた。其處で舶來の自動車や、セルロイドの人形や色んな物を十三四圓も買つて、それを一纏めにして包ませた。

するとそこへ、折悪しくお須磨がひよつこり姿を現して來るのに、辰衛は直ぐ氣がついた。

お須磨は自分の舌で、あれほど夫婦の間へ差した水も、何時の間にか利目を失つて今では絢子と辰衛が、奈何したところか、昨日あたりからまた不思議に仲が好くなつて、今日はまた連立つて××へ買物に出かけたさ云ふことを書生の小山から聞くと、急にそれが氣にかゝつて、立つても居てもゐられなかつたのだつた。

『どこまで、あの人に鈍い辰衛さんなんだろう。』
お須磨は然う考へながら、仲働のお兼を連れて、私と二人の後を追つかけて出て

来たのであつた。

六十七

『今日はお揃ひで、お買物ですか。』お須磨は二人の傍へ寄ると、然う言つて話しかけた。お兼は後の方から、辰衛等に丁寧にお叩頭をした。

絢子は悪いところで、厭なものに出會つたと思つたが、辰衛も甚く面喰つた形で、返辭も直ぐには出なかつた。

『まあ、玩具を澤山お買上げになつたこと。』と、お須磨は今店員が、そこで一纏めにして、紙に包むべく取集めてゐる玩具に目を付けながら、『お遺物になさるんでございませう。』

絢子は餘計なお世話だと云はないばかりに、返辭をするのも忌々しさうな顔をしてゐたが、お須磨は一體が、面と對つてゐれば、何の蟠まりも憎氣もない無邪氣さうな女なので、さう無愛想に遇ふのも氣毒だといふ氣もした。

『あの、些つと餘所へね。』と、絢子は愛想らしく言はずにはゐられなかつた。

『不斷から世話になつてゐる僕の友人の子供が病氣でね。』辰衛も其場の照隠しに、然う言添へた。

『あ、然うですか。』と、お須磨は呑込んだやうな顔をして、『私も實は少し買物があつて來ましたの。』

『何を買ふんですか。』

辰衛が爲様事なしと云つた風に相手をするに、お須磨は調子に乗つて、

『あの、私、いつからか絢子さんの、其のコートの柄が大變好いと思つてゐましたの。それにね、お前は何でも下町風に、意氣に〜と扮るからいけないと云はれてゐますから、これからは山手式にね、少し高尚に扮らうかと思ひますの。濟みませんがお買物が濟んだら貴方少し見て頂戴な。』と、辰衛に甘へるやうに言つた。

『笑談でせう。僕にそんなことが判るもんですか。』

『でも、人さまが傍からそれが好いと言つて下さればね、私は自分の氣が決りますの

よ。そんな奥さまのばかしに苦勞なさらないで、少しは私の買物にも附合つて下さつたつて可いでせう。ねえ絢子さん、可いでせう？」

「え、どうぞ……。」と、絢子は鷹揚に然う言つた。

「さあ、貴方の奥さまのお許しが出たんだから可いでせう。ねえ貴方、決してお手間は取らせませんから。私、是非貴方に見て戴きたいんですの。」

「困るね、いつそ親爺を引張つて來れば可いの。」

「そんなこと言はずに、是非、ねえ貴方。」と、お須磨は手を執つて引張らないばかりにした。

「ちや奈何する？」と、辰衛は低聲で絢子に、「お前一人でもいゝかい。俺が行く必要はないかい。」

「え、私一人で參りますわ。」

「ちや、些つとお須磨さんに附合つて、直ぐ歸るからね。」と、辰衛は不承々に言つたが、更にお須磨に、「ちや些つとどうか下まで一緒に來て、休憩室で待つてゐて下さ

い。僕、絢子を送つてから附合ひますから。」

「あ、然う。どうも濟みませんね。」

四人は一緒に下の休憩室へ入つて、そこで暫らく茶を喫んで待つてゐたが、やがて辰衛と絢子は起つて、出口で悉皆買物を受取る時、それを持つて絢子を送り出した。

「どうだ、此所から届けさせては、大分嵩張るから、厄介だらう。」

下足場で辰衛は絢子に然う言つた。

「可ございますの。やつぱり自分で持つて行つた方が、可いやうですわ。」

やがて、外で絢子が車に乗るのを見届けてから、辰衛は元の休憩室へ還つて來ようとする時、お須磨はもう其所まで來てゐた。

「どうも濟みませんね。」と、媚るやうな笑顔をして、お須磨は彼を見た。

「あんまり長い事は御免蒙りますが、一體何を買ふんでしたつけね。」

「何を買つたら可い？」お須磨はびつたり辰衛の側へ寄添つて、甘たるい口の利方をした。

『私、ほんとはね、別に買ひたいものはないんですわ。』

それを聞くと、辰衛は有繋に怫然とした。そして、呆れたやうに目を圓くして、お須磨を見詰めた。

『貴方、そんな可憐い顔しちや厭よ。』お須磨は幾らか険しい目色をして窘めるやうに言った。半月形の美しい眉根に八の字を寄せて、切長な猥らな目に溢れるばかりの熱情を添へてゐた。圓味をもつた大振な鼻が幾らか剽輕に見えたが、此の女の仇つばいことは、此頃殊に色深さを増して來た。それに身體もめつきり肉づいて、脂ぎつて來た彼女の肉體は、今や成熟した水桃のやうな美しさと、匂ひをもつてゐた。

辰衛は些つとその美しい顔に見惚れたやうであつたが、直に嚴肅な態度になつて、『實に呆れてしまう。あなたが是非買物をするから、附合つてくれと言ふから、わざわざ絢子を一人やつて後へ残つたのに、何も買物はないなんて、あんまり人を莫迦にしてるぢやありませんか。』

『おや、どうも濟みません。』と、お須磨は淑やかさうな、しかし態どらしいお叩頭を一つして、『そんなに怒るもんぢやありませんよ。それお折角かうして睦じくしてゐらつしやるどころを、私が間へ入つて邪魔をしたのは、悪いかも知れませんがね。偶にはいゝぢやありませんか。』

『偶にも時々にも……あなたは吾々夫婦を愚弄して、それで何か面白いことでもあるんですか。僕はこれで失敬します。』

『ほ、大層御立腹だこと。』と、お須磨は可笑さうに笑つて、『ぢや私、何か買ひますから、貴方見立て、くれて？』

『御免蒙ります。これでも僕は忙しいんですからね。』

『ぢや可いわ。一緒に歸りませう。』

『勝手になさい。僕はこれから少し寄るところがありますから。』

『奥さまの後を追つかけて行くんでせう。白井とかいふ人の家へね。』

『莫迦を言つちや困ります。』

『でも、絢子さんは白井といふ人のところへ、行らつしたに決つてゐますわ。あんな

におみやげを澤山持つてね。』お須磨は皮肉に笑つて、『ねえ、然うでせう、そのくらゐのことは、私にだつて解つてよ。だから私、貴方がお氣毒でならないの。』

『何がそんなに、氣毒です？』

『だつて、然うぢやありませんか。いくら大切な奥さんだつて、あんなにまで絢子さんのお機嫌を取らなくなつて……貴方は立派な島家の相續人ぢやありませんか。高が貧乏政治家の娘を、そんなに崇め奉らなくとも、濟みさうなものだと私思ひますわ。』

『何ですつて？』

『また、そんな可怕い顔をしてさ。』と、お須磨は些つと睨付けるやうな目色をして、

『いくら私に、そんな可怕い顔をして見せたつて駄目よ。貴方が絢子さんに甘いところを、私はちやんと知つてゐますから。』

『實にどうも、何と言つて可いか……。』

『判らないて言ふの。可いぢやありませんか。私はね、貴方のお爲を思つて言ふんですから。』

二人はいつの間にか、休憩室の中に立つてゐた。そこには幸ひ女の客が二人休んでゐるばかりだつたので、辰衛は多くの人にちろ／＼見られることから免れて、ほつと

した。

『左に右、私は歸りまゐり。』

『え、可ござんすとも、私も歸りますから。』と、お須磨は後から跟いて來たお兼を振り返つて、低聲に、『あのね、私些いと用事が出來たからね、もう少し經つてから歸りますよ。お前に何か買つて上げたいけれど……。』お須磨は思付いたやうに、帯の間の紙入から紙幣を二三枚取出して、『これで半襟でも買つて、悠然遊んでゐても可いわ。旦那にも誰にも内密よ。』

そして、お兼を追遣つてから彼女はまた辰衛の傍へ寄つて來た。

『貴方、少しお話があるのよ。さあ、出ませう。』お須磨は、今度は自分の方から促して、先へ立つた。

『何處へ行くんです？』

お須磨が餘りに猥々しくするのに、大分反感を起した辰衛は、少し突櫛負に言つた。

『ですから、歸心んちやありませんか。さあ、いらつしやい。一緒に出ませう。』お須磨はさつさと先に歩き出したが、それでも辰衛が怒つて逃げはしないかと、始終後を振り向き、氣勢だけ取急いで見せた。

外の人達からちろ／＼見られるのが厭さに、辰衛はもう奈何にでもなれと云つた風に、いくらか自棄氣味になつて黙まりのまゝ、お須磨の後から下へ下りて出口へへ行つた。

『貴方、何處かへお寄りになると仰言つたわね。ごつちへいらつしやるの。』

電車通へ出ながら、お須磨はいくらか皮肉な目を辰衛に投げた。

『もう駄目です。遅くなつちまつたから……。』

『私に引止められてね。ほんとに相済みませんでしたわ。ぢやね、折角一緒になつたんですから、暫らく私に交際つて頂戴な。不可ない？』

『……。』

『ね、可いでせう。さあ、こつちへ行きませう。』

お須磨は辰衛の返辭も待たないで、店の角を右へ折れて日本橋の方へと歩を移した。辰衛もかうなつては、もう爲方がないと云つた風に、矢張り黙々として跟いて歩いた。今頃は、絢子はもう白井の家へ行つてゐるだらうと心に思つた。子供のために買った色んな品物を、白井はどんな態度で受けてゐるだらう。きつと最初は辭退するに違ひない。それを絢子はまた何と言つて、どんな挨拶をして先方に納めさせるだらう、などと心の中で思つた。

すると、自分が最初白井と妻との間柄を疑つた時のことが、またちらと頭腦に浮んで、辰衛は些つと顔を曇らせた。そんなことを思ふと、自分が今日絢子と一緒に行かなかつたことが、何だか取返しつかないこのやうに思へてならなかつた。偶然の

やうで偶然ではないお須磨の出現が、非常に邪魔に思はれてならなかつた。さうして、それが絢子のために、反つて幸ひとなつたやうな結果になつたことが彼は妙に氣になり出した。お須磨と並んで、かうやつて歩いてゐるのが、いかにも莫迦々々しく爲様がなかつた。さう思ふと傍に調子を合して歩いてゐる女が、いかにも小面憎くなつて來た。

自分一人に早くなりたいたいといふ氣がして、辰衛はお須磨と別れることを考へ出した。何とかして、彼女を捲くことは出来ないかと考へたりした。と、突然お須磨の聲が耳元でした。

『魚河岸は何時見ても、何だか昔を思出すところですね。』

丁度橋の上を二人は歩いてゐた。お須磨は騒々しく引切りなしに走る電車の切れ目から、左手の河岸を眺めながら言ふのであつた。辰衛はそれでも黙つてゐた。

お須磨はそれに少し拍子抜のした氣持を感じたが、直ぐ自分の辭に押蔽せて、『貴方も随分ねえ。あれだけ私が言つたのに、直ぐ絢子さんと仲直りするのね。』

『仲直り?』絢子のことを言はれたので、つい辰衛は引込まれて、『僕は別段、仲直りなんかしたことはありませんよ。』

『ほ、あんなに見せ付けたくせに。』と、お須磨はちろりと睨むやうにして、『折角私は貴方のことを思つて言つたのに、貴方はさうは解つてくれないんですからね。夫婦の仲にいろんなことを言ふほど莫迦を見ることはないつて言ふけど、ほんとに私は今度それを悟りましたわ。』お須磨は辰衛夫婦に水を差したことを、お爲ごかしに言つて、『絢子さんはね、もう旦那のお肚ではね、御離縁にきまつてるんですよ。貴方、それを知つて、?』と、彼女の眼は異様に輝いて來た。

『離縁?』辰衛は暗い目をして言つた。

『え、然うよ。』それに引換へ至極平氣にお須磨は應へた。

『罪もないものを、何の口實でそんなことが出来るんです?』と、辰衛は嘲笑ふやうに『私もあなたに言はれて、一旦は絢子を疑つて見ました。しかし、靜かに絢子の様子を見たり考へたりしてゐると、自分が悪かつたのです。自分の誤解であつたことが判

つたのです。絢子は潔白です。』

『私もね、絢子さんを、何も悪く言ひたかありませんのよ。』お須磨は少し調子を變へて、『ですから、あの方のことではね、これで相當に辯護もして見たのですけれどもね、今日のやうなことがあると、私もつい嫌氣がさして了ひますわ。』

二人は町中だと云ふことも忘れたやうに、お互に興奮してゐたが、左に右何處かそこらでコーヒーでも飲まうと云ふので、とあるカフェーの前へ來ると、そこへ入つて行つた。そして、二階へ上つて奥まつた小部屋で一二品づゝ食べる物と、飲物を注文した。

『それで、つまりは奈何なんです？ 親父はもう離縁と決めてゐるんですか。』辰衛は、女給仕がゐなくなつて、少し落著いてから訊いた。離縁と言ふ言葉は、可也彼を動かしたのである。

『それはもう、二木と云ふ辯護士が宅へ來ない前からのことですよ。』お須磨は、ついで此頃まで洋食は匂ひを嗅ぐのも嫌な方であつたが、それでも辰衛に交際ふためにフの。お父さまの御立腹も無理はないと思ひますわ。』

『それは、父としては然うでせう。しかし、あれは然ういふ意味の負債ぢやないんだから、私の結婚と同時に、徳義上債權は消滅してゐる筈なんです。』

『貴方も二木とか云ふ辯護士さんと同じことを言つてるのね。理窟なんか奈何でも付けられるわ。でも、借りたものは借りたものでせう。それも可いけれど、若し貴方がどこまでも絢子さんを離縁しないとすると、大變なことになるますわ。』

『僕を勘當でもすると云ふんですか。』

『え、事によるとね。』

『そんな莫迦なことが出来るものか。僕は島家の立派な相續人ですよ。』

『だから、貴方はお氣毒なんです。』と、お須磨は一段聲を潜めて、『こんなことは私の口から大變言ひにくいことですよ、何ですか、貴方は今のお父さんの、眞實の子ぢ

やないといふ話ぢやありませんか。』

『ご、どうして……そんな莫迦なことが……。』

『でもあの、貴方は元々御養子なんださうですよ。でも、外にお子さんがないもんですから、長男の籍には入つてゐるんです。』

『奈何してゐます？』辰衛の顔は見る／＼蒼くなつて、『そんなことは今まで一度も耳にしたことはありません。信じられませんね。あなたの辭ですが、それは父から聞いたことですか。』

『え、さうですとも、私が何でそんなことを拵へごとなんかするもんですか。』と、お須磨は益す言葉の調子を深めて行つて、『それにはね、少し私の方にも思ひ當ることがあるんですけれども、でもね、それが本當に然うですか、何うですか、判りませんか。うっかりしたことはお話し出来ませんわ。』

彼女はいつか、養父に聞いた辰衛と絢子と、どちらか自分の兄妹に當るといふことを思出してゐた。

『思ひ當ること？ それは一體何ういふことですか？ 聞かして下さい。介意ません。聞かして下さい。』辰衛は、夢遊病者のやうになつて、ふら／＼とお須磨の方へ一膝乗り出して來た。さうして、其の眼は異様に光つた。

誘

惑

六十九

辰衛はお須磨の言ふことなどは、餘り信用も出來ないと、一應は疑つてもみたが、そんな大事なことをお須磨が捏造する理由もなさうに思はれた。そして、然う思つてみると、何だかそんな點がないでもなかつた。然う云へば、文平は勿論、近年死んだ母親にも少しも背たところのないことにも、初めて氣が付いた。今までは死んだ母親の、どこかに面影が似通つてゐるやうな氣がしてゐた。しかし、今となつてみると、その感じは何の根據もない幼少の習慣で、然う思はせられて來たに過ぎないのだと考

へられた。

辰衛の眼には、みる／＼失望の色が浮かんで来た。彼は今まで覺えたことのない侮辱と、羞耻を感じた。奈何して今までそれに氣が付かなかつたかと自ら怪しんだ。さう思ふと、彼は今の父に對して疎ましいやうな感じが湧いたと同時に、感謝と不安の混つた不思議な感情が、内面からにじみ出して来た。と云つて、しかし彼は眞實の父母について、何にも感じはしなかつた。考へてみようとも思はなかつた。彼は遂に暗い表情をして、ちつと黙つてしまつた。

『あなた、また怒つちや困りますよ。私がおしやべりだから、言つてしまつたけれど、聞かない方が可かつたと思ひなすつて?』と、お須磨は氣味悪さうに、また働はるやうな調子で言つた。

『そんなことはありません。』辰衛はちつと押懐へてゐるやうな、冷靜な調子でさう言つた。

『こんなことは、一生知らないで済ました方が、可いことかも知れないの。』と、お須

磨も勢ひ眞面目にならずにはゐられなくなつて、しみ／＼とした調子になつて、『ですけれどね、私としてね、言はない譯にはいかなかつたんです。貴方が本當にお氣毒でならないもんですから。』

『いや、有難う。』辰衛は重々しく頭を擡げて、『で、何ですか、先刻言つたあなたの思ひ當ることつて、一體それは何ですか?』

『それですか?』と、お須磨はしげ／＼と辰衛の顔を覗き込むやうに見ながら、『それはね、でも、言はない方がいゝわ。そんなことまで言つて、此上貴方に氣を悪くさせちやあ、一層お氣毒でなりませんもの。』

『いや、介意ひません。言つて下さい、言つて下さい。』辰衛はコップのビールをぐつと飲み干して、『もう驚きません。何とも感じないかも知れない。言つて下さい。介意はないから。』

『でもねえ。』お須磨は養父から聞いた辰衛か絢子か、どちらか自分の兄妹に當るといふことは、此場合どうしてもすらく／＼と話出す勇氣をもたなかつた。養父の話も養

父自身が、それに確信をもつてゐるといふ譯ではないし、迂かりそんなことまで言つて、此上辰衛を心配させたくはなかつた。彼女としては、たゞかうした自由な天地、お互に窮窟な邸を離れて、二人きりで費す此の自由な時間を、もつと興味あるものとして、面白く遊びたいと思ふのであつた。その肚で彼を誘つたのに、話がかう理にうんで了つては、折角彼女が豫期したことを裏切られて了うやうな氣がして、お須磨は一人で氣をいらくさせた。

『よろしい、言へないなら、今日は強ひて聞きますまい。しかし、何ですか、絢子を離縁しなければ、父は僕を勘當するつて言ふんですね。』と、辰衛はまだ不安の眼を睜つた。

『え、さうなの。』話がそつちへ向いたので、お須磨はほつとした。

『あゝ、もう僕はいやになつて了つた。いつそ僕もあの家を出よう。さう聞くと、何だかもうあの邸へ歸る氣がしない。』絶望的に辰衛は言つた。其の聲は肚から絞り出すやうだつた。

『およしなさいよ。そんな自暴は……。』

『あゝ、厭だく。僕はもう歸りやしない。』

辰衛は急に激しく食卓を叩くと、女給を呼んで、新らしくウキスキイを命じた。興奮しきつた其の顔には蒼筋が走つてゐた。

暫らくすると女給は、角なウキスキイの壺と二つの小さな脚付きの猪口を持つて來た。先づ辰衛の猪口に盈々と盛上るばかりに注いでから、お須磨の前の猪口にも注がうとした。

『私は可いのよ。』と、お須磨は手を掉つた。

『さいでございますか。』女は壺をそこに置いて、直ぐ引退つて行つた。

辰衛はちびくく飲みながら酒がかうばつと口の中で開けて解けるやうな快感を味はつてゐたが、八分目ばかり飲むと、今まで蒼かつた顔が、愛嬌のあるその目元からほうつと紅味を帯びて來た。

『まあ、なんて早くお酒が廻るんでせう。』お須磨は熱情的な眼を輝かして、心から